

(3) 若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致

ア はじめに

若宮大路と鶴岡八幡宮を中心としたこの地域は、栄華を極めた鎌倉時代から現代に至るまでの 800 年余りの時の流れをありありと想像することができる代表的な場所であり、段葛^{だんかつら}を挟んで両側に商店が並ぶ風景は鎌倉独特のものである。

そして、若宮大路に点在する昭和初期の建物を活用した商店は、こうした時代の流れの中で観光地として発展した鎌倉の姿を想起させる証人である。特に、若宮大路の中ほどに位置する湯浅物産館と三河屋本店はその代表的な例といえる。

若宮大路沿道では、これらの歴史的建造物が鎌倉を代表する土産物店、鎌倉彫などの老舗、教会などが立地し、現代的な店舗と一緒に並んでいる風情から、日本遺産で「「いざ、鎌倉」～歴史と文化が描くモザイク画のまちへ～」としてストーリーが語られているモザイク状の鎌倉の歴史、魅力を体感できる。

鶴岡八幡宮を訪れる人々や若宮大路沿道の商店などが織りなす賑わいや営みは、小町通りや若宮大路とこれを結ぶ路地、JR 鎌倉駅前にまで広がっている。

イ 鎌倉における遊山の歴史

鎌倉幕府滅亡後の鎌倉には、室町幕府によって東国支配の拠点「鎌倉府」が置かれていた。その長官である鎌倉公方足利氏は禅宗に帰依し、京都とは別の五山制度を確立させるなど社寺を積極的に保護していたが、15 世紀半ばに鎌倉公方が鎌倉支配を放棄したことで、まちは衰退し、中世都市の活気は失われ、鎌倉は静かな農漁村へと変貌していった。

しかし、16 世紀に入ると、鎌倉は武家政権発祥の聖地として重視されるようになり、戦国大名の後北条氏が鶴岡八幡宮の修造を行うとともに太平寺仏殿を円覚寺に移築して舍利殿を建立、17 世紀には徳川家康が鶴岡八幡宮や建長寺など主要な社寺の復興を進めるなど、時の権力者や政権による支援などもあり、社寺も再び脚光を浴びるようになった。

そして江戸時代、泰平の世が続く中、鎌倉は、現在も知られる浄瑠璃、歌舞伎の代表的な演目の舞台として取り上げられるようになった。鎌倉時代の曾我兄弟の仇討^{あだうち}を題材とする『寿 曾我対面^{ことぶき そ がのたいめん}』などで舞台となるほか、『仮名手本 忠臣蔵^{かな で ほんちゆうしんぐら}』のように江戸幕府をはばかって舞台を江戸から鎌倉へ置き換えて上演するものも多く、これらを通じて庶民に知られる場所となり、社寺も信仰の対象としてのみならず、江の島など景勝地の見物と結びついて遊山の対象となりはじめる。こうして鎌倉には江戸やその近郊から武士や町人など多くの遊山客が訪れることとなり、さらに賑わいを取り戻していくこととなる。



図2-16 曾我物語を題材とした錦絵

江戸時代にまとめられた鎌倉の地誌としては、徳川光圀が鎌倉を巡覧した際の記録である『鎌倉日記』や、それをもとに光圀の命で編纂された『新編鎌倉志』^{しんぺんかまくらし}のほか、幕府の昌平坂学問所編纂の『新編相模国風土記稿』などが挙げられる。また、江戸時代中期に庶民が鎌倉に盛んに訪れるようになると、『鎌倉名所記』、『鎌倉絵図』など、名所巡りに携帯するためのいわゆるガイドブックやガイドマップが盛んに出版されるようになった。

当時、鎌倉への参詣は、江の島詣に組み入れられることが多く、江戸を発って東海道を下り、程ヶ谷（横浜市保土ヶ谷区）から「金沢道」に入ると、梅の名所「杉田」や景勝地「金沢八景」を見物し、朝夷奈切通を越えた先の「鎌倉」では、絵図を手に社寺を巡り、極楽寺坂から七里ヶ浜を抜けて「江の島」へ詣でる、あるいは、藤沢から「江の島」を詣で、海沿いを鎌倉へ向かい、その後「金沢八景」へと抜けるという道のりが一般的であった。なお、鎌倉から極楽寺坂を抜け、七里ヶ浜、腰越を通り江の島へ至る道は「江^{えの}嶋道^{しまち}」と呼ばれ、今と変わらぬ風光明媚な景色が広がっていた。このほか、江戸から鎌倉へ至るには、東海道の戸塚宿から大船、山ノ内、巨福呂坂を経て鎌倉へと入り、名越切通を抜けて大津（横須賀市）へと続く「浦賀道」を通る場合もあった。

また、江の島は、江戸や関東一円から講を組織して大山を参詣する「大山詣^{おおやまもうで}（大山参^{あふり}り）」と対で巡拝されることも多かった。これは、大山阿夫利神社の本尊である不動明王を男神、江の島の江島神社の本尊である弁財天を女神に例え、片方だけ参拝することを忌む風潮があったためといわれる。



図2-17 鎌倉名所記

庶民の間に遊山が定着した文化文政期（1804～1829年）以降、東海道の名所が浮世絵に描かれるようになり、その中でたびたび題材となったのが、七里ヶ浜から江の島を望む風景である。七里ヶ浜から海を挟んで江の島と富士山を望むという構図が人々に好まれ、葛飾北斎や歌川広重をはじめ、様々な絵師がこの題材を取り上げている。

このように、鎌倉を画題とした浮世絵も頻繁に制作された。なお、遊山については、「鎌倉遊山にみる歴史的風致」（160 ページ）にも記載する。

ウ 若宮大路沿道の賑わいと発展

こうしたことを背景に、江戸やその近郊から遊山客が多く訪れるようになると、鶴岡八幡宮の参道である若宮大路の沿道には、遊山客を対象とした商店、茶屋、旅籠屋が軒を連ねるようになった。天保4年（1833年）に発行された十返舎一九の『諸国道中金の草鞋』（第十九編）の雪ノ下・段葛の項には、「八幡宮の前の道を雪の下といふ。茶屋、旅籠屋おほし。」とあり、挿絵からも多くの人々が通りを行き交い、往時の賑わいがうかがえる。

さらに近代に入ると、明治21年（1888年）に東海道線大船駅が開業、同22年（1889年）に横須賀線鎌倉駅が開業、同35年（1902年）には江之島電気鉄道（現江ノ島電鉄）が開業するなど鉄道網の整備が進み、若宮大路の沿道には、観光客を対象とした宿泊、飲食、土産店が増え、観光地の賑わいを支える商業活動がさらに発展していった。

これに伴い、地域の団体による段葛の桜並木の手入れ、鎌倉の特徴であった松並木の保存、清掃活動などが行われるようになった。



図2-18 往時の雪ノ下・段葛の様子（『諸国道中金の草鞋』より）

エ 建造物

(ア) 若宮大路・段葛

鎌倉時代から都市の基軸線とされていた若宮大路は、源頼朝が寿永元年（1182 年）に妻である北条政子の安産祈願のため造ったもので、史跡に指定されている。

若宮大路の中央には、「段葛」と呼ばれる一段高い参道が築かれており、当初は鶴岡八幡宮から鎌倉海岸にほど近い一ノ鳥居まであったようだが、時代の流れとともに一部は平坦地となった。大正 6 年（1917 年）には段葛の現存部分が鶴岡八幡宮境内に改めて編入され、史跡若宮大路とは別に、史跡鶴岡八幡宮境内の一部として史跡に指定されている。

また、昭和 61 年（1986 年）には、「日本の道 100 選」の一つに選定されている。

段葛では、平成 27 年（2015 年）11 月から平成 28 年（2016 年）2 月にかけて、参道としての風致、景観の向上、桜並木の景観の回復等を目的とし、環境整備工事を実施した。大改修により、中世の骨格を踏襲する鎌倉の都市の中心線である若宮大路の歴史的景観の質が高まり、若宮大路沿道に新たな魅力と賑わいを加えている。



写真2-163 若宮大路(明治時代)

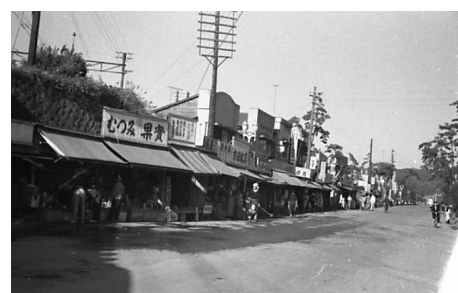


写真2-164 若宮大路
(昭和 34 年(1959 年))



写真2-165 若宮大路と
二ノ鳥居

(イ) 鶴岡八幡宮 一ノ鳥居 二ノ鳥居

鶴岡八幡宮の一ノ鳥居・二ノ鳥居は段葛と並ぶ若宮大路のシンボルである。鳥居は、単なる入口を示すものではなく、神域と現世を隔てる結界であり、神聖な場所であることを示す意味を有している。

一ノ鳥居は若宮大路南端側に位置し、「浜の大鳥居」とも呼ばれる。国の重要文化財に指定されており、高さ約 8.5m、柱の太さは約 92cm の石造りの明神鳥居である。関東大震災で上部が破損したものの、昭和初期に一部の石を補って復旧された。柱上部には「寛文八年戊申八月十五日 御再興 鶴岡八幡宮石雙華表」(1668 年)の刻銘がある。それまでは、長らく木造だったが、寛文 8 年(1668 年)に第四代将軍徳川家綱によって寄進され、石造りになった。

二ノ鳥居は現在の段葛の入り口に位置し、若宮大路を通して鶴岡八幡宮を参拝する人々を出迎える。一ノ鳥居と同様に、第四代将軍徳川家綱によって寄進され、石造りになった。関東大震災により倒壊したため、昭和 2 年(1927 年)に鉄筋コンクリート造りに再建された。昭和 48 年(1973 年)の写真からも、現在と変わらない鳥居の様子が分かる。二ノ鳥居手前の狛犬は、昭和 36 年(1961 年)に奉納されたものである。なお、白旗神社脇の鎌倉国宝館の前庭にある「源実朝歌碑」は、関東大震災で倒壊した二ノ鳥居の西柱を利用している。



写真2-166 一ノ鳥居



写真2-167 二ノ鳥居と段葛
(昭和 48 年(1973 年))

(ウ) 湯浅物産館

湯浅物産館は、明治 30 年(1897 年)に貝細工の製造加工・卸売りの店舗として創業し、現在の建物は昭和 11 年(1936 年)に店舗兼住宅として建築されたもので、間口六間、奥行十一間半の 2 階建ての建築物で、若宮大路沿いの戦前の創建となる商業建築としては最大の規模である。

令和 3 年(2021 年)に登録有形文化財となった。棟札は桁行の中央、正面から 3 本目の棟東にくぎ打ちされており、その裏面に「上棟 昭和十一年七月十日 湯浅新三郎住宅」と墨書がある。また、座机はその甲板裏面に「昭和十一年十一月十五日 祝新築出入職一同」と記されている。これらにより、この建物が昭和 11 年(1936 年)7 月に上棟し、同年 11 月に竣工したことが分かる。加えて、縮尺 50 分の 1 で 1・2 階の平面図を和紙に墨入れして描いた「店舗新築工事設計図」が残されており、創建時の姿を知ることができる。

横浜の貿易商社を模したという外観は、木造の建物の前に装飾を施した「看板建築」と呼ばれる形式をとっており、道路に向かって広く開放された店舗空間や店舗中央に設けられたトップライトなどの建物内部も、往時の建築的特徴をよく示している。



写真2-168 店舗天井・吹抜



写真2-169 湯浅物産館

Ⅰ 三河屋本店

三河屋本店は、明治 33 年（1900 年）創業の酒店で、伝統的な出桁造りの店構えが、若宮大路の沿道でひととき目を引く存在である。この建物は、この地で酒店を営んでいた竹内福蔵が、関東大震災で倒壊した建物に代えて昭和 2 年（1927 年）に建てたものであり、建設年の根拠は、棟木の墨書及び「昭和二年 新築工事控 式月より」と表書きされた和綴の帳面の存在である。墨書は、住宅棟の南北に通る棟木の下端部に北側から「上棟昭和二年六月二日 竹内福蔵」と記されたものであり、「新築工事控」は、昭和 2 年（1927 年）2 月から 10 月までの各月の工事経費を項目別に細かに記したものである。この 2 つの史料により、三河屋酒店が昭和 2 年（1927 年）2 月に起工、6 月に上棟し、同年 10 月に竣工したことが分かる。

伝統的な出桁造りの母屋、蔵、そしてトロッコ及びトロッコ用レールなど、戦前の商店の姿がそろって残り、使われている三河屋本店は、建築史的・民俗史的に見ても、鎌倉の戦前の商店建築を代表する貴重な建物といえる。平成 18 年（2006 年）に登録有形文化財となっている。



写真2-170 三河屋本店



写真2-171 トロッコ用レール

オ 活動

(ア) 若宮大路沿道の賑わいと商店の営み

若宮大路沿道周辺は、1年を通して修学旅行や遠足に来た学生、観光客で賑わっている。若宮大路の中央に位置する段葛を通り、鶴岡八幡宮に参拝し、帰りに若宮大路や小町通りに並ぶ土産物店、飲食店などに立ち寄る人々の様子は、若宮大路周辺の賑わいを感じられる鎌倉らしい光景である。昭和45年（1970年）の写真からも、現在のような活気を感じることができる。

特に、若宮大路沿道には、古くから営業を続ける老舗店舗があり、鎌倉らしい風情を醸し出している。例えば、鶴岡八幡宮の一ノ鳥居横にある鎌倉彫の老舗の博古堂は、明治33年（1900年）頃から現在の場所で店舗兼工房を構えている。職人の手仕事による鎌倉彫の美しさと伝統技術を今に伝える店舗として地域に深く根ざしている。

また、明治27年（1894年）創業の和菓子店の豊島屋は、関東大震災後から若宮大路の現在の地に本店を構えている。豊島屋の代表銘菓で120年以上の歴史がある「鳩サブレ」は、観光客をはじめ多くの人々に親しまれており、目印の鳩が描かれた袋を提げて観光を楽しむ観光客の姿を鎌倉の各地で見ることができる。

若宮大路沿道には、このような鎌倉を代表する老舗店舗や、三河屋本店や湯浅物産館などの歴史的建造物が現代的な店舗と一緒に並んでおり、その風情から、日本遺産のコンセプトであるモザイク画のような鎌倉の歴史、魅力を体感できる。



写真2-172 賑わう若宮大路
(昭和45年(1970年))



写真2-173 若宮大路の土産物屋に
立ち寄る人々
(昭和42年(1967年))



写真2-174 豊島屋本店
(昭和20年代(1945年頃)後半)



写真2-175 豊島屋の袋を提げて
若宮大路を歩く人々

(イ) 若宮大路沿道における住民・沿道における活動

鶴岡八幡宮から海に至る軸線となる若宮大路の環境や風格を保とうと、住民や地域のボランティア団体による美化活動が継続して行われている。昭和 54 年（1979 年）発行で澤壽郎著『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 鎌倉』によると、戦時中には、小学生が道路清掃を行っていた様子などが写真で残されており、鎌倉市民にとって、昔から若宮大路が特別な存在であったことがうかがえる。

鎌倉のシンボルともいえる若宮大路やその周辺における活動の先駆けとしては、鎌倉同人会による松並木の保全活動が挙げられる。明治時代の終わり頃の若宮大路の絵ハガキには、巨木の松が鬱蒼^{うっそう}と続く「松並木」の風景が記録されている。しかし、虫害による松枯れが急増したため、当時鎌倉でまちづくり活動をしていた鎌倉同人会（詳細は「別荘文化に由来する歴史的風致」（182 ページ）に記載）は大正 4 年（1915 年）から、踏み荒らされてしまった根方を玉石と芝で土寄せし、周囲を焼き丸太と太い針金で囲うなどの保護活動を開始した。大正 12 年（1923 年）の関東大震災により若宮大路の松並木の大半が焼失してしまったことを受け、同会は大正 14 年（1925 年）に若木 100 本を植栽し、さらに昭和 6 年（1931 年）には、松の根方を守るための囲いを、鉄筋コンクリート製の柱と太い鉄製の鎖による防護柵に改修した。昭和 30 年（1955 年）に人や自動車の往来が急増したため、若宮大路に歩道を作る計画が持ち上がり、防護柵の石柱は一部を除き撤去された。平成 26 年（2014 年）から始まった段葛の改修工事の際、当時の石柱が発見され、段葛に記念碑として残されている。

その後、若宮大路の松並木は、数本を残すのみとなってしまうが、近年、市民団体や地元町内会により松並木の植樹が行われ、往時を思わせるような景色を見ることができるようになった。

また、昭和 55 年（1980 年）の新聞記事には、当時豊島屋の社長であった久保田雅彦が

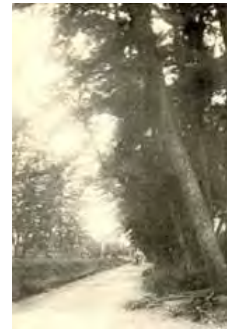


写真2-176 鎌倉八幡宮前松並木
(明治時代)



写真2-177 小学生の道路清掃(戦時中)



写真2-178 鎌倉同人会による
松並木防護柵の石柱跡
(昭和 55 年(1980 年))



写真2-179 若宮大路の松

豊島屋本店前の若宮大路沿道に自費で黒松を植えたことが書かれており、若宮大路の景観が地域の人に大切にされていたことが分かる。

こうした活動はその後も受け継がれ、昭和 49 年（1974 年）からは商店会メンバーを軸とした鎌倉みどりの会により若宮大路の桜並木の保全・若宮大路の美化活動が行われた。その功績を踏まえ、平成 13 年（2001 年）の緑の都市賞では、同会の長年の若宮大路周辺での緑化活動に対し、「都市緑化基金賞」を受けた。

現在は、さらに同じ志を持つ団体や企業などが加わり、若宮大路において定期的な清掃や植栽の手入れなどの美化活動が継続して実施されている。なお、若宮大路では、グリーンバード鎌倉などの市民等の有志による団体が、市のアダプトプログラムの登録を得て、清掃活動や花植え活動などを継続的に行っている。

若宮大路沿道では、これらの市民団体や地元商店街、地域の人々による清掃活動、美化活動を見ることができ、鎌倉の財産として若宮大路の景観や風情を残そうとする人々の思いを感じることができる。

（ウ）ぼんぼり祭

a 鶴岡八幡宮（段葛・参道）・小町通り

鶴岡八幡宮の「ぼんぼり祭」は、毎年立秋の前日から 8 月 9 日まで、境内がぼんぼりのあたたかな光で照らされ、幻想的な光景を見ることができる。また、夕刻頃からぼんぼりを見ようと鶴岡八幡宮へ向かう人が多く集まり、若宮大路周辺は、賑わいを感じることができる。なお、鶴岡八幡宮のぼんぼり祭については、社寺の祭礼・行事であることから、103 ページにおいて詳しく記載している。



写真2-180 小町通りのぼんぼり祭

同時期に小町通りでも、地域の子供たち等が描いたぼんぼりが掲出される。鶴岡八幡宮のぼんぼり祭は、小町通り沿道にも裾野が広がり、地域の賑わいを演出している。

b 御成通り

御成通りで行われる「ぼんぼり祭」は、鶴岡八幡宮や小町通りとは異なり、毎年 7 月末の週末に開催される。ぼんぼりの柄は一般公募で集められた力作が揃い、約 260 枚の絵柄を使用した約 90 基のぼんぼりが通りを彩る。昭和 49 年（1974 年）から始まり、幻想的な夏の夜を演出する。御成通りのぼんぼり祭では、祭りを協賛する店舗が気に入ったぼんぼりに店舗名の入った賞札を付ける。後日、賞札が付けられた絵柄の作成者には協賛の店舗の賞品が配られる。また、ぼんぼりの掲出だけでなく、昼間から子供向けのイベントが開

催される。

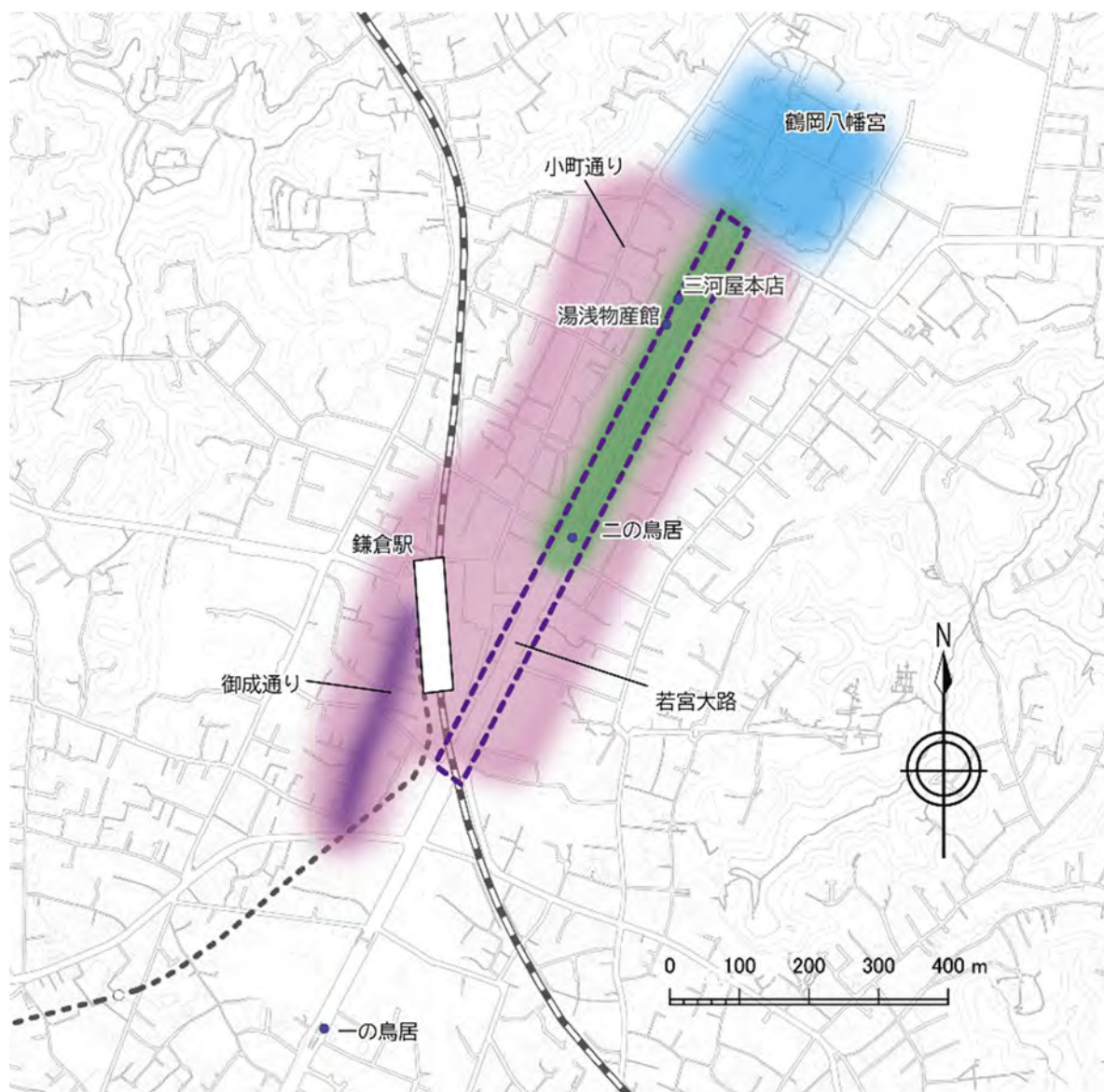
御成通りのぼんぼり祭は、鎌倉の夏の風物詩として地域の人々に親しまれており、祭りの時期には、昼は子供たちの楽しそうな声が聞こえ、夜は賑わう人々がぼんぼりの光でオレンジ色に照らされる光景が見られる。



写真2-181 御成通りのぼんぼり祭
(昭和 48 年(1973 年))



写真2-182 御成通りのぼんぼり祭



	歴史的風致を形成する建造物	
	若宮大路沿道の賑わいや商店の営みを感じられる範囲	
	若宮大路沿道における住民の活動が見られる範囲	
	ぼんぼり祭の実施範囲	鶴岡八幡宮
		御成通り

図2-19 若宮大路周辺における営みの市街地への広がり

表2-7 若宮大路沿道における営みに関する主な活動の年表

活動種別	実施主体	大正9年以前	昭和5年	昭和15年	昭和25年	昭和35年	昭和45年	昭和55年	平成2年	平成12年	平成22年	令和2年	現在
賑わいや若宮大路沿道の営み	各商店	湯浅物産館の土産物店としての商い											
		三河屋本店の酒屋としての商い											
		博古堂 鎌倉彫店としての商い											
		豊島屋 菓子店としての商い											
住民・商店会などの営み	鎌倉同人会	丸太等による松の保護活動								松の保護及び美化活動			
		松の防護柵の改修											
	鎌倉みどりの会								若宮大路の桜並木保全・若宮大路の美化活動				
	アダプトプログラム登録団体など								若宮大路の清掃活動				
ぼんぼり祭り	鶴岡八幡宮								鶴岡八幡宮のぼんぼり祭りの開催				
	鎌倉御成商店街協同組合								御成通りのぼんぼり祭りの開催				

カ まとめ

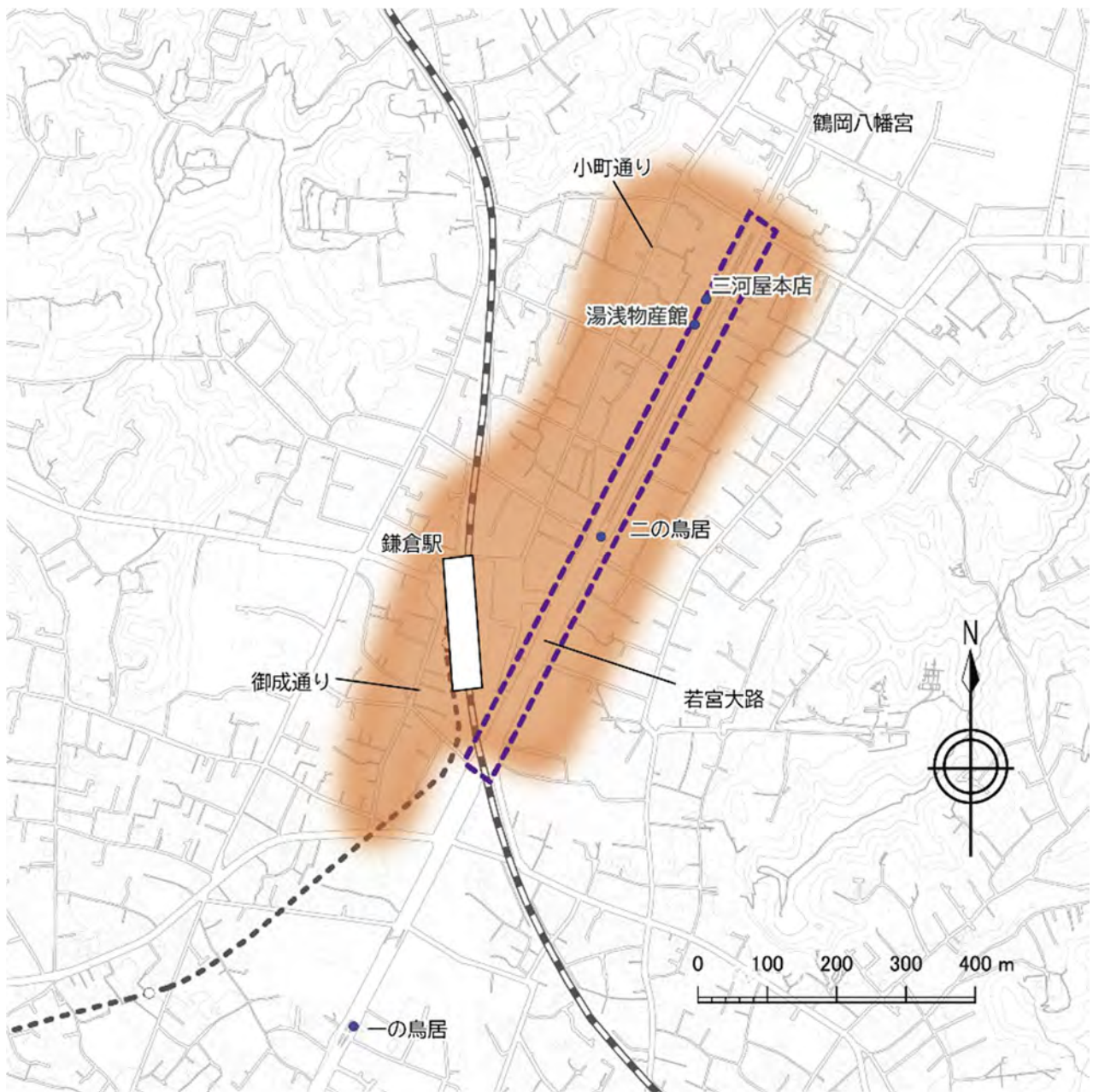
このように多くの観光客が訪れる鎌倉駅東口から鶴岡八幡宮に至る地域は、参道である若宮大路を基軸として、格子状に路地が交わり、市景観重要建築物等をはじめとする多くの人に愛される「鎌倉らしい建物」が存在している。新旧の建築物等が調和する形で多くの商店が軒を連ね、古くから観光地として発展してきた鎌倉の人々の営みの歴史を今に伝えている。その設^{しつら}えと営みは、通りを歩く人々を惹きつける魅力をもっている。

若宮大路沿道では、これらの歴史的建造物や鎌倉を代表する土産物店、鎌倉彫などの老舗などが立地し、現代的な店舗と一緒に並んでいる風情は日本遺産のストーリーにも描かれているような、モザイク画のような鎌倉の歴史、魅力を体感できる場所である。

鎌倉の夏の風物詩の一つである「ぼんぼり祭」は、鎌倉の風情を強く感じられるものであり、幻想的な情景は訪れる人に深い感銘を与えている。

また、若宮大路沿道の商いは、これとほぼ平行に走る小町通りや鎌倉駅前、鎌倉駅西口側の御成通りなどにも面的な広がりを見せ、観光客を対象とした土産物店・飲食店が多く立ち並び、年間を通じて賑わいをみせており、地域で営まれている商業活動はまさに活力を与え、首都圏屈指の一大観光都市として年間約 1,600 万人もの人々が訪れる鎌倉を支えている。

こうした若宮大路沿道における営みが調和することにより、訪れる人々にとっても、鎌倉ならではの歴史と暮らしが重なり合う歴史的風致が形づくられている。



	歴史的風致を形成する建造物
	若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致の範囲

図2-20 若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致の範囲

(4) 鎌倉遊山にみる歴史的風致

ア はじめに

「若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致」(146 ページ) に記載したように、鎌倉は江の島参詣の折の通り道である江の島～金沢間の観光地として、近世以降発展した。

江戸時代の貞享2年(1685年)成立の『新編鎌倉志』をもとに、江戸時代中期に作成された『鎌倉名所記』や『鎌倉絵図』といった案内書や絵図が庶民の間に広まり、鎌倉は遊山(行楽)の目的地として多くの人々に親しまれるようになった。このように、ガイドブックやガイドマップに記載された社寺や旧跡は、遊山客の訪問によって徐々に「名所」として認識されていくようになった。

明治以降、開港地の横浜近郊にあることから、多くの外国人観光客が訪れた。『鎌倉絵図』をはじめとして、江戸時代のガイドブックは縦長の冊子が主流であったが、明治以降に横長の冊子に姿を変え、明治20年(1887年)に刊行された

『鎌倉江嶋一覧』には、題名が英字で入れられるなど、多くの外国人が訪れたことがうかがえる。また、明治から昭和にかけて療養地、海浜保養の別荘地として栄えるなど、鎌倉は江戸時代の庶民の物見遊山・参詣としての対象から、別荘地・観光地として変化していった。鎌倉に訪れる目的が変わっていく中でも、江戸時代に名所として多くの人々が訪れた社寺や史跡は地域の人々や関係者らによって今日まで大切に残されてきた。

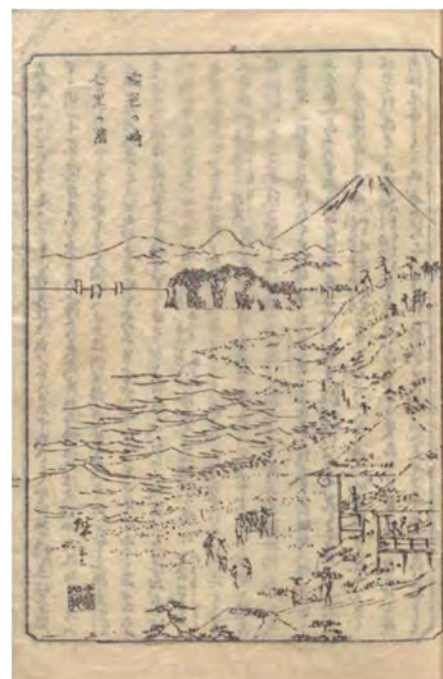


図2-21 『鎌倉名所記』
稲村つ崎 七里つ濱

イ 建造物

(ア) 社寺

『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』、その他の紀行文などに記載され、江戸時代の物見遊山の対象となっていた社寺のうち、今日まで残る社寺を一部紹介する。各建造物の詳細は第1章や「社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致」(67～89 ページ)、「海にまつわる歴史的風致」(131～135 ページ) に記載している。

表2-8 遊山の名所一覧

図中番号	名称	記載されている主な文献
1	英勝寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行 ⁴⁹ 』他
2	浄光明寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
3	鶴岡八幡宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
4	八雲神社（大町）	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉日記 ⁵⁰ 』他
5	荏柄天神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記 ⁵¹ 』他
6	銭洗弁財天宇賀福神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
7	佐助稻荷神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
8	由比若宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
9	葛原岡神社・日野俊基墓	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』他
10	熊野新宮	『鎌倉絵図』他
11	鎌倉宮・護良親王土牢	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀 ⁵² 』他
12	甘縄神明宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
13	建長寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
14	円覚寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
15	高德院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
16	本覚寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
17	虚空蔵堂	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
18	円応寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉記』他
19	宝戒寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
20	明王院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
21	極楽寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
23	光明寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
24	覚園寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
25	長谷寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
26	杉本寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
27	安養院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
28	寿福寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
29	浄智寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
30	浄妙寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
31	小動神社	『新編鎌倉志』他
32	御霊神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
33	永福寺（永福寺跡）	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他

※ 図中記号は図2-24に対応している。

⁴⁹ 寛政9年（1797年）成立。田良道子明甫著。

⁵⁰ 文化6年（1809年）成立。扇雀亭陶枝著。

⁵¹ 万治年間（1658年～1661年）頃成立。浅井了意著。

⁵² 延宝8年（1680年）成立。自住軒一器子著。

(イ) 史跡・旧跡

a 切通

鎌倉七口と呼ばれた七切通の「名越切通」^{ななきりどおし}、「朝夷奈切通」^{あさいな}⁵³、「巨福路坂」^{こぶくろ}、「亀ヶ谷坂」^{かめがやつ}、「仮粧坂」^{けはい}、「大仏切通」^{だぶつ}、「極楽寺坂切通」は、中世～近世にかけて鎌倉の出入口として、鎌倉を訪れる人にとって重要な目印となっていた。

『新編鎌倉志』で記載されていることはもちろん、『鎌倉絵図』においても多く描かれており、鎌倉市内外だけでなく、鎌倉を周遊するうえでも重要であったことが分かる。それぞれの切通の詳細については、後述の「歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致」(211 ページ) に記載する。



写真2-183 朝夷奈切通

b やぐら

鎌倉の丘陵部や斜面に造られた横穴式の墳墓^{ふんぼ}であるやぐらも名所として江戸時代に遊山の対象となった。

鎌倉時代草創期の有力御家人の一人である千葉常胤^{つねたね}の次男であった相馬師常^{そうまもろつね}の墓といわれる「相馬師常墓やぐら」は、『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』で紹介されている。



写真2-184 相馬師常墓やぐら

また、北条家最後の地と言われる「高時腹切りやぐら」は、「東勝寺跡」とともに『新編鎌倉志』で紹介され、その後刊行された多くの『鎌倉絵図』では「北条高時腹切やぐら」として記載されている。やぐらの詳細については、後述の「歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致」(211 ページ) に記載する。

⁵³ 「朝夷奈切通」の史跡の指定名称は「朝夷奈切通」であるものの、「あさひなきりどおし」と読む場合や、「朝比奈切通」^{あさひな}という表記を用いる場合もある。

c その他の旧跡

鎌倉幕府ゆかりの屋敷跡などの旧跡は、建造物などの形としては、そのほとんどが中世の時代に消失しており、残ったものも近世時点で多くが消失している。しかしながら、源頼朝や北条家など鎌倉幕府との結びつきが強い旧跡は、往時をしのばせる場所として、近世以降の人々も多く訪れたと推察される。その証拠として、江戸時代に成立した『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』で取り上げられ、明治の古地図、地誌にも記載されている。

代表的なものとして、十一人塚及び和田塚を紹介する。それ以外の主な史跡・旧跡は表2-9に示す。

十一人塚は稲村ヶ崎から江ノ電「極楽寺駅」へ向かう道沿いにひっそりとたたずむ供養塔である。この地域には、元弘3年（1333年）の新田義貞による鎌倉攻めの際に、極楽寺坂切通の北条側の守りを突破した新田軍の大將の^{おおだちむねうじ}大館宗氏が、その後の猛反撃により、奮戦むなしく最後まで残った11人とともに討死したという話が残っている。この塚は、そのときの11人を弔うために設けられたとされ、市の史跡に指定されている。



写真2-185 十一人塚



写真2-186 十一人塚の
史跡指導標

敷地内には、供養塔以外に昭和6年（1931年）3月に鎌倉町青年団により建てられた史跡指導標という石碑が建っている。高さ約6尺、幅約2尺5寸の仙台石で作られている。一覧表で紹介した旧跡や名所にあったであろう建造物は、前述したようにすでに失われてしまっているが、鎌倉のまちの至るところでこのような石碑を目にすることができ、旧跡・名所の説明板として、鎌倉独自の景観を生み出している。

由比ガ浜にある和田塚は、江戸時代には無常堂と呼ばれていた場所である。明治以降、建暦3年（1213年）に起きた北条義時と和田義盛の武力衝突（和田合戦）の結果、和田方の戦死者を葬った場所と伝わる。近代に開墾が進んだことに伴い、周辺にあった石塔や遺骨などが集められた場所とも考えられるが、由比ガ浜一帯で繰り広げられたという和田合戦と結びつけられ、現在に至っている。



写真2-187 和田塚

表2-9 旧跡等

図中記号	名称	記載されている主な文献
a	和賀江嶋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
b	段葛	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
c	北条高時腹切りやぐら	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
d	十一人塚	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
e	稲村ヶ崎	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』 他
f	星ノ井	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『東海道名所記』 他
g	稲瀬川	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』 他
h	阿佛邸旧跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『三浦紀行 ⁵⁴ 』 他
i	大蔵幕府旧跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『諸国道中金の草鞋』 他
j	盛久頸座	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『東海道名所記』 他
k	東御門	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
l	西御門	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『東海道名所記』 他
m	永福寺跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』 他
n	若宮大路幕府旧跡	『諸国道中金の草鞋』 『東海紀行 ⁵⁵ 』 他
o	安達盛長邸跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』
p	畠山重忠邸跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』
q	二十五坊跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
r	歌ノ橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
s	夷堂橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
t	筋替橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
u	乱橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
v	相馬師常墓やぐら	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』
w	和田塚	『鎌倉実測図』 他

※ 図中記号は図2-24に対応している。

ウ 活動

(ア) 鎌倉遊山

江戸時代、鎌倉は江戸から気軽に訪れることのできる遊山の地として親しまれ、多くの人が鎌倉を訪れた。主な旅の経路は、江の島から腰越、七里ヶ浜、稲村ヶ崎、長谷を経て若宮大路へと至り、さらに朝夷奈切通を通過して金沢方面へと抜ける経路や、江戸から東海道を經由、又は船で金沢まで来て、金沢から朝夷奈切通を通り、鎌倉に入り、江の島へ至る経路であった。これらの道筋は古くから参詣・行楽の旅路として多くの人々が行き交

⁵⁴ 享和元年（1801年）成立。一鶴堂白英著。

⁵⁵ 安政6年（1859年）成立。小田切日新著。

ったルートであり、江戸時代の紀行文に繰り返し登場する風景である。

『相中紀行⁵⁶』には、「稲村ヶ崎の出さきを袖ヶうらと云、様々の旧跡あり。いなむらの崎の茶屋に休。ばゞが茶屋といふ由。ここにて鎌倉の絵図をひさぐ。家とじ我は顔に古都の講談す。」とあり、『鎌倉日記⁵⁷』にも、「よこてが原なんどいへる所は、いにしへの戦場なる由、土人（十一人カ）の口（塚カ）ほそき道の片はらに、小高くつきたるうへに、石の印をたてあり。」と記されているように、中世鎌倉の歴史や文化、風景を楽しむ様子が数多く描かれている。

現在でも、当時の人々が歩いたとされる道筋には、葛飾北斎や歌川広重などが描いた富士山と江の島を望む風光明媚な景観や、数々の紀行文、『新編鎌倉誌』、『鎌倉名所記』、『鎌倉名所絵図』等の文献に書かれた鶴岡八幡宮をはじめとする歴史的な社寺、切通などの史跡・旧跡が数多く点在している。これらを巡りながら、往時の旅人の心に思いを馳せることができる環境が江戸時代から続いている。

明治時代以降、横須賀線や江ノ島電鉄、路線バスといった交通機関の整備により、日帰りで訪れる人々も増え、季節の見頃の花々が咲く社寺巡りや鎌倉のハイキングコース散策、別荘建築巡りなどテーマ別観光の多様化が進展し、遊山から観光へと形は変化しながらも、多くの人々が鎌倉を訪れている。さらに、明治時代から広がった海浜レジャーの地として、海水浴や磯遊び、海辺の散策といったレジャー活動と古くからの社寺や史跡、別荘建築物巡りを組み合わせる来訪者や、江の島、富士山を望む海辺の景観を楽しむ来訪者も見る事ができる。

季節ごとに表情を変える緑や海の景観と、長い時を経て現在に伝わる社寺等の歴史的遺産によって、各所において鎌倉ならではの歴史や自然に触れることを楽しむ人々を見ることができる。



図2-22 富士三十六景 相州七里浜 葛飾北斎
天保元年(1830年)～天保3年(1832年)頃



図2-23 富士三十六景 相模七里ヶ濱
歌川広重 江戸時代

⁵⁶ 寛政9年(1797年)成立。田良道子明甫著。

⁵⁷ 文化6年(1809年)成立。扇雀亭陶枝著。

(イ) 歴史的遺産の顕彰・保護活動

中世の時代から現在まで残った社寺や史跡の名所の数々は、美しい緑や海岸地域の景観とともに多くの人々を引きつけてきた。しかし、来訪者が求める鎌倉固有の景観や歴史的資源は、必ずしも常に安泰であったわけではなく、何度も喪失の危機に見舞われてきた。

武家の都として栄えた鎌倉は、鎌倉幕府の滅亡や室町時代の鎌倉府の消滅によって荒廃し、明治時代の神仏分離令による廃仏毀釈の風潮により社寺は大きな打撃を受けた。加えて、関東大震災では多くの歴史的建造物が損壊し、貴重な文化資源の多くが失われた。

このような危機的状況に直面しながらも、今もなお中世の趣や自然、景観が残っていることは、各時代における地域の人々や関係者の保全活動によるものが大きい。

『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』に紹介され、その後江戸時代の遊山の対象となった名所では、鎌倉の歴史が風化しないよう顕彰活動が行われ、その場所の案内や歴史などを刻んだ史跡指導標などが建てられた。これらは、大正6年(1917年)から昭和31年(1956年)の間に鎌倉町青年会⁵⁸や鎌倉町青年団、鎌倉同人会などの民間の団体により、鎌倉に対する郷土愛の具体化と鎌倉の発展を目的として建立された。大正時代以降に建立された後、現在まで定期的に地域の人々やボランティアによる周囲の清掃や草刈りが継続して行われており、風化など経年劣化は見られるが、十一人塚をはじめとして、建立当初の姿を残しているものが多い。

近年では、NPO法人鎌倉ガイド協会が主体となり、史跡指導標を3基建立している鎌倉同人会とともに、史跡指導標の文字の塗料を塗りなおすなど、その保全に努めている様子が折々で見られる。

また、和田塚では、昭和22年(1947年)にその保存を目的の一つに掲げる一般社団法人由比ガ浜青年会が成立しており、以来、定期的な清掃や説明板の設置など、地域の伝承の場を保全する活動が継続している様子が見られる。



写真2-188 十一人塚の史跡指導標
(昭和48年(1973年))



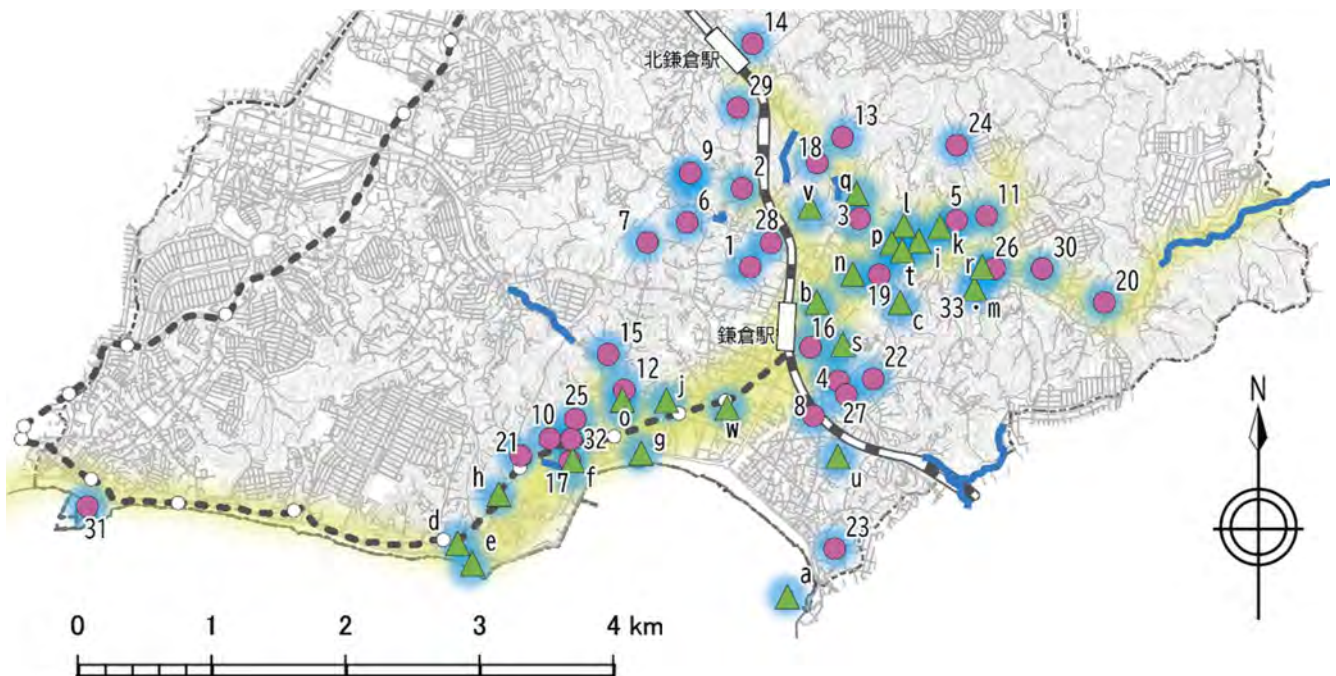
写真2-189 十一人塚の史跡指導標

⁵⁸ 鎌倉町青年会は、鎌倉に住む人々により結成され、その後、「鎌倉町青年団」、「鎌倉市青年団」と名称を変えながら、鎌倉の教育、社会奉仕、文化振興など多岐にわたる活動を展開した。

このような歴史的遺産の顕彰・保全活動により、鎌倉に訪れた人々は、江の島から稲村ヶ崎、由比ヶ浜といった海沿いの道筋から、若宮大路、朝夷奈切通に至るまで、江戸時代の遊山客が親しんだ名所やその歴史を知ることができるとともに、それらを大切に守ろうとした先人たちの思いに触れることができ、江戸の遊山文化から現在までの鎌倉の重層的な歴史を体感することができる。



写真2-190 史跡指導標の清掃活動



		鎌倉遊山における参詣社寺
	歴史的風致を形成する建造物	鎌倉遊山における訪問史跡・旧跡
		切通
	鎌倉遊山の主な経路	
	歴史的遺産の顕彰・保護活動が見られる範囲	

図2-24 鎌倉遊山にみる活動の市街地への広がり

※ 社寺と史跡・旧跡等における図中番号・記号はそれぞれ表2-8と表2-9に対応している。

エ まとめ

近世以降、庶民による鎌倉遊山の広がりを通じて鎌倉の景観や数多くの社寺・史跡が名所として親しまれるようになった鎌倉では、そこに残る歴史的遺産や昔から変わらない風光明媚な景観を見ることができ、今でも往時の遊山を体感できる。すでに姿を消してしまった史跡も少なくないが、大正時代以降に設置された史跡指導標などにより、かつて中世に武家の都として栄えた鎌倉の歴史や記憶を、現在の私たちに語り継いでいる。

これらの歴史的遺産が残っている背景には、その歴史を顕彰し、後世へ伝えていこうとする人々の思いが込められており、その精神は、鎌倉に住む多くの市民に受け継がれ、市民主体の保全活動につながっている。

江戸時代の人々が遊山を通じて味わった鎌倉の自然や風情は、現代においてもなお、変わらぬ魅力として体験することができ、鎌倉独自の歴史的風致を形成している。

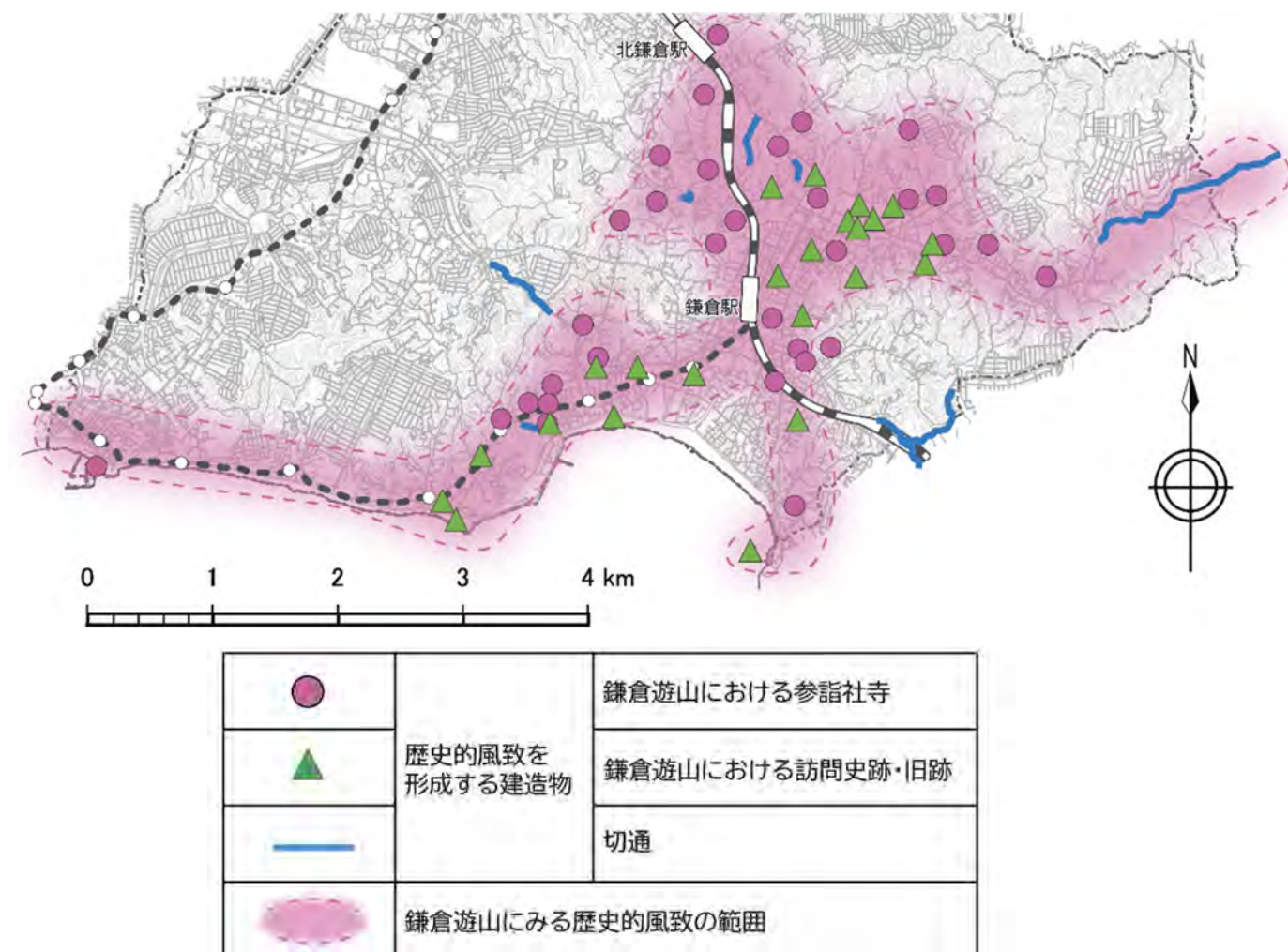


図2-25 鎌倉遊山にみる歴史的風致の範囲

(5) 周遊観光にはじまる「江ノ電」にみる歴史的風致

ア はじめに

風光明媚な湘南のまちをゆったりと走る江ノ島電鉄（以下、江ノ電と記す）の歴史は、明治 35 年（1902 年）9 月 1 日に江之島電気鉄道（現江ノ島電鉄株式会社）が開業したことに始まる。

以来 120 年以上にわたり、江ノ電は単なる交通手段を超え、地域の暮らしと観光、そして文化を支える存在として、鎌倉の風景の中に溶け込んできた。



写真2-191 まちなかを走る江ノ電

イ 建造物

(ア) 鉄道関連施設

江ノ電の開業当初の軌道は、東海道線の藤沢停車場と江の島を結ぶ藤沢～片瀬間 3.42km であったが、延伸工事を進め、明治 36 年（1903 年）6 月の片瀬～行合（現七里ヶ浜付近）間開業を皮切りに、追揚（現七里ヶ浜～稲村ヶ崎間）・極楽寺・大町（現和田塚～鎌倉間）と延伸された。

明治 43 年（1910 年）11 月 4 日には藤沢～小町（鶴岡八幡宮二ノ鳥居前）間 10.27km 全線が開通したが、当時の終点は若宮大路の大巧寺付近にあり、現在のように鎌倉駅西口へ乗入を開始したのは、昭和 24 年（1949 年）になってからであった。この当時から変わらぬ単線の軌道は、現在藤沢駅から鎌倉駅までの全長 10.0km で、そのうち約 6 km が鎌倉市内を通っている。

江ノ電の鉄道設備は、随時新しいものに更新されており、開通当初から残るものは少ない。しかしながら、音無川（稲村ヶ崎）、行合川（七里ヶ浜）、神戸川（腰越）などの川や水路に架かる橋梁や暗渠・開渠などの構造物は長く江ノ電の運行を支えるものとして残っているものもある。

神戸橋は、神戸川にまたがる国内で唯一の鉄道と道路との併用橋である。明治 36 年（1903 年）に架けられた橋梁が、昭和 4 年（1929 年）に、道路との併用橋に改築された。竣工当時の写真と比較し、橋脚や桁は改築当初のものが現在も残っていることが分かる。構造は、橋台、橋脚の基礎が杭打コンクリート造りで、本体は鉄筋コンクリート造りである。



写真2-192 神戸橋
(昭和 42 年(1967 年))

音無川橋梁は、音無川にまたがるもので、明治 40 年（1907 年）8 月 16 日の開業に合わせて整備され、江ノ島電鉄株式会社の内部資料によると、昭和 59 年（1984 年）に架け替

えられたものの、橋台の一部は建築当時のものが残っている。兩岸に短い橋台を設けた桁橋であり、江ノ電、橋梁、音無川と周辺の緑が一体となった風景を見ることができる。

行合川橋梁は、明治36年（1903年）4月に完成し、大正13年（1924年）に補強工事が行われた後、昭和22年（1947年）、昭和30年（1955年）、平成5年（1993年）に路線近代化計画の一環で架替工事が行われ、現在に至る。

極楽寺駅の軌道の付近には、暗渠となっている箇所があり、江ノ島電鉄株式会社の内部資料によると、極楽寺駅付近の暗渠は、明治42年（1909年）に竣工し、修復が行われ現在に至る。

大町開渠は江ノ島電鉄株式会社の内部資料によると、昭和40年（1965年）架け替えで、橋台は当時のものと考えられている。

橋梁や暗渠・開渠といった構造物以外にも、手動遮断機などが軌道上の構造物として残っている。

このように、軌道についてはレール等ほとんどの設備は更新されているものの、昭和38年（1963年）の航空写真から分かるように、軌道の位置はほとんど変わらず、また、軌道沿線の水路をまたぐ橋梁や暗渠、手動遮断器などの一部の設備は、部材の状態からも相応の年代を経ていることから、昔のままの姿を残していることが分かる。



写真2-193 行合川の橋梁
(昭和42年(1967年))



写真2-194 手動遮断機
(鎌倉駅～和田塚駅)
(昭和48年(1973年))

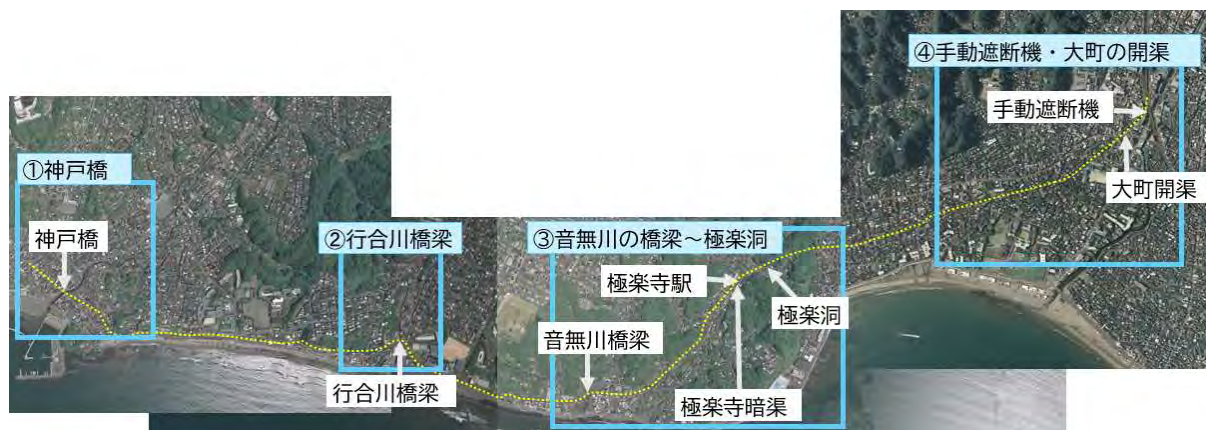


図2-26 江ノ電の軌道の航空写真(全体図)

※ 図中の番号①～④はそれぞれ写真2-195から写真2-198の範囲を示している。

a 神戸橋

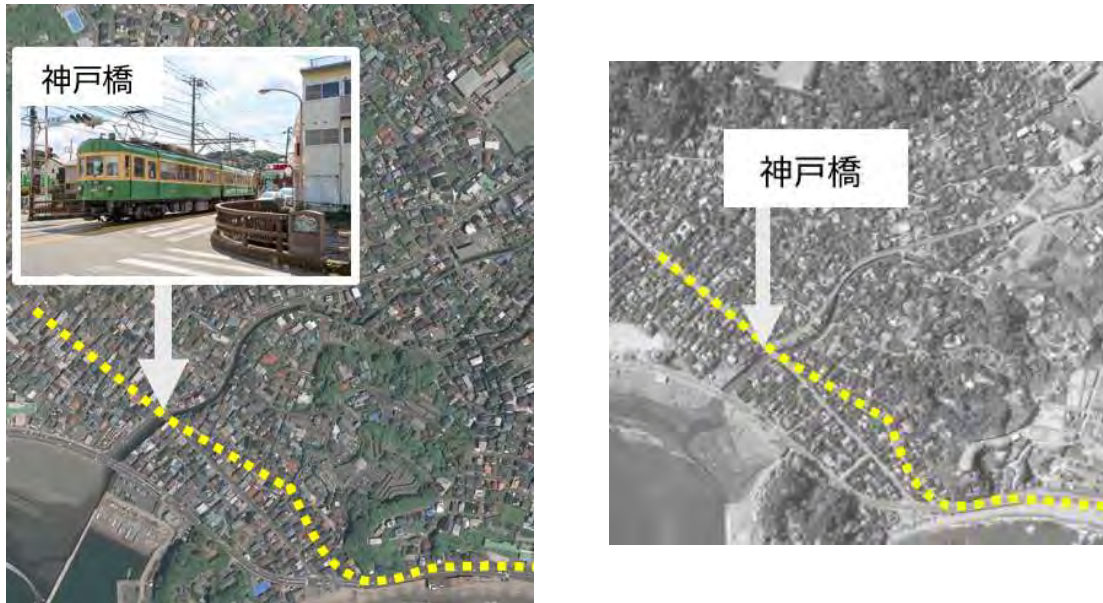


写真2-195 神戸橋の航空写真と江ノ電の軌道(点線)
現在(左)と昭和 38 年(1963 年)(右)

b 行合川橋梁

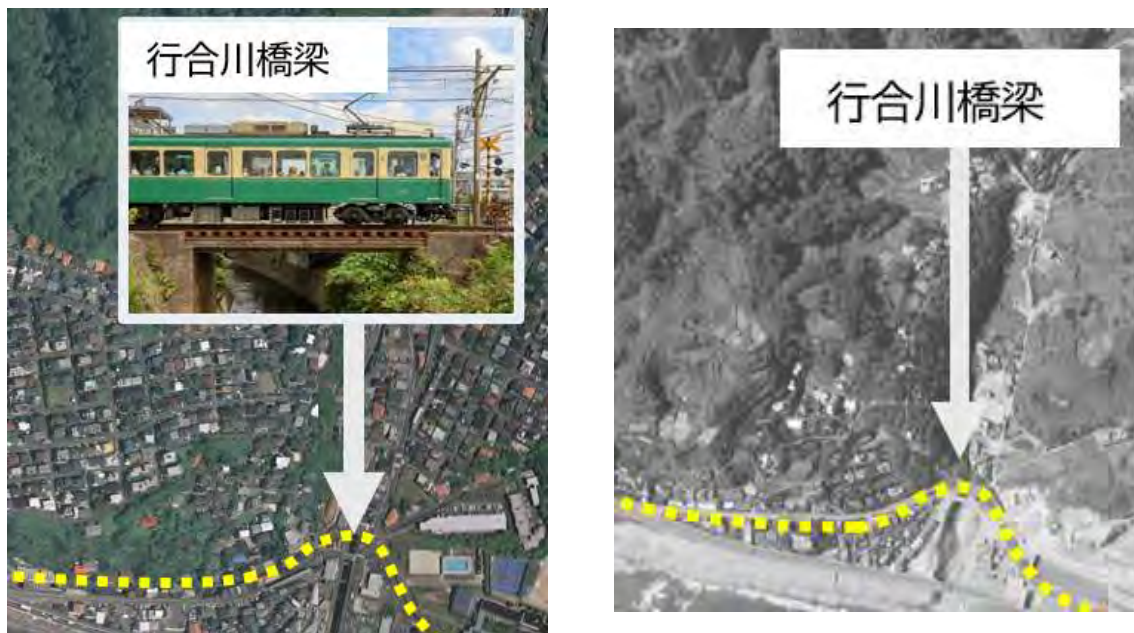


写真2-196 行合川橋梁の航空写真と江ノ電の軌道(点線)
現在(左)と昭和 38 年(1963 年)(右)

c 音無川橋梁～極楽洞

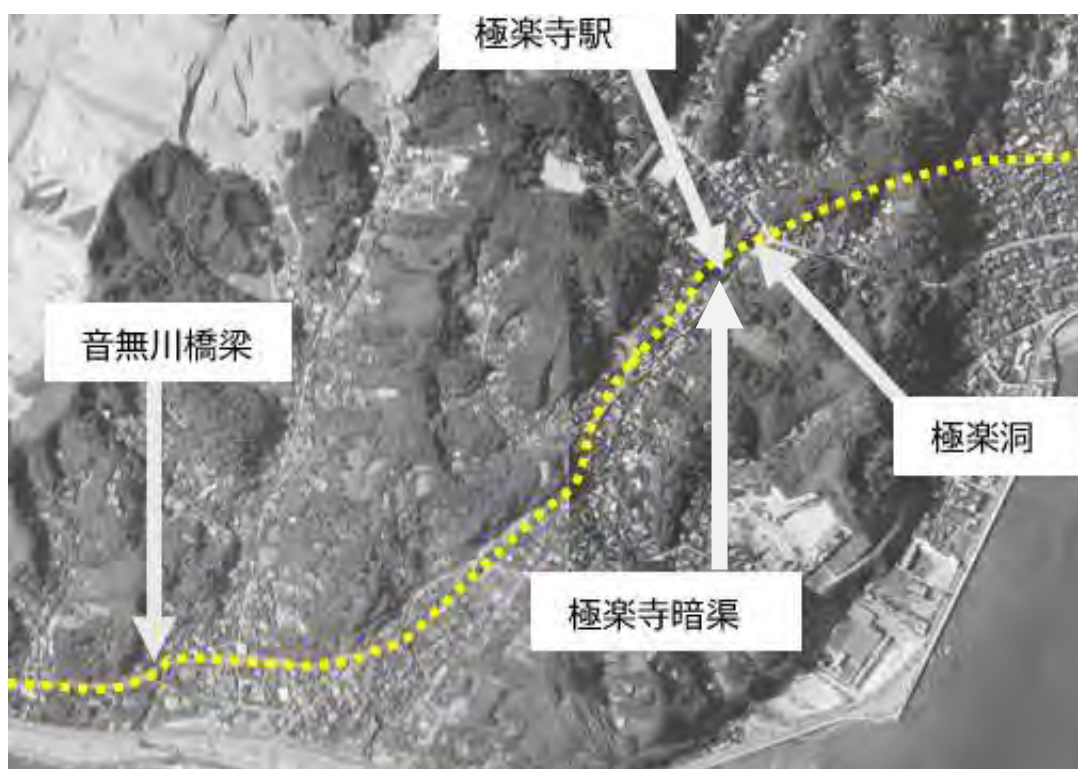


写真2-197 極楽寺駅周辺の鉄道関係構造物の航空写真と江ノ電の軌道(点線)
現在(上)と昭和 38 年(1963 年)(下)

d 手動遮断機・大町開渠

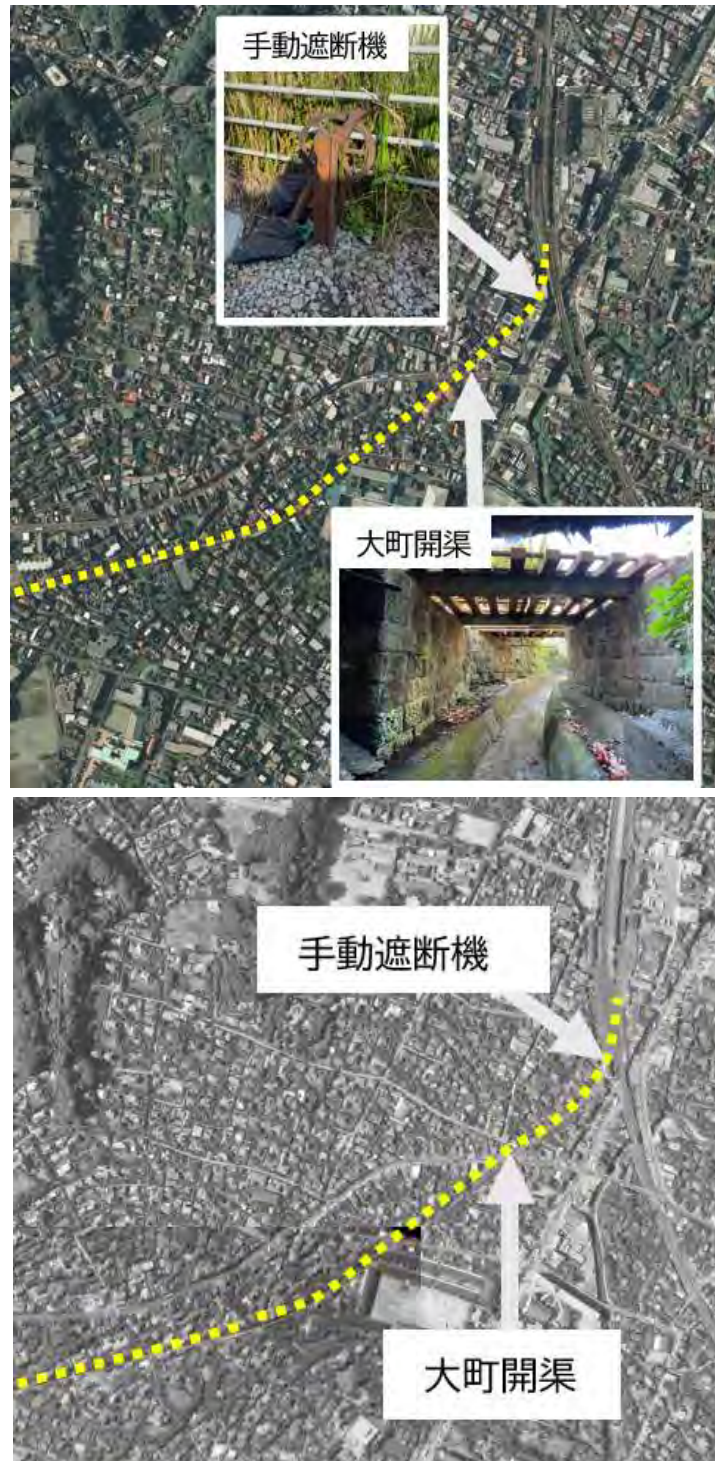


写真2-198 鎌倉駅・長谷駅周辺の鉄道関係構造物の航空写真と江ノ電軌道(点線)
現在(上)と昭和 38 年(1963 年)(下)

(イ) 極楽洞^{ごくらくどう}

煉瓦造りの坑門が特徴的な江ノ電唯一のトンネルである「極楽洞」は、明治 40 年（1907 年）8 月 16 日に開業した区間のうち極楽寺～長谷間に位置する全長 209m に及ぶ鉄道トンネルである。この工区の工事は、明治 39 年（1906 年）に起工され、用地買収のために一時中断されたものの、翌年の明治 40 年（1907 年）に開業した⁵⁹。坑門のデザインは、明治時代の煉瓦・石積みによるトンネルの基本的な要素を引き継いでおり、胸壁（パラペット）^{へんがく}に扁額^{へんがく}をはめている。扁額は極楽寺側に曾禰荒助^{そねあらすけ}の揮毫^{きごう}による「極楽洞」、長谷側に松方正義の揮毫による「千歳開道」^{ちとせ}の文字が掲げられている。当時、曾禰荒助は片瀬に、松方正義は由比ヶ浜にそれぞれ別荘を構えていたことから、地元の有力者の縁で書き分けられたと推測される。「極楽洞」は建設当時の原型をとどめている極めて希少な例であることから、市景観重要建築物等に指定されている。極楽寺駅に隣接する桜橋から極楽洞を見下ろす景観は、古都鎌倉に近代化の息吹を伝えた江ノ電の歴史をしのばせている。



写真2-199 極楽洞



写真2-200 極楽洞
(昭和 41 年(1966 年))

(ウ) 極楽寺駅

江ノ電は、藤沢駅から鎌倉駅間の総延長 10.0 km を約 37 分間で運行する。単線であり、全線開通時に 39 駅だった路線内駅数は現在 15 駅となっている。街中を走る路面電車のような区間もあり、信号待ちやカーブも多いため、平均速度は時速 20 km 程度となっており、ゆっくりとした速度で沿線の景色に溶け込みながら走る姿は鎌倉を代表する歴史的遺産の一つといえる。車両は 2 両又は 4 両編成であるため、駅舎も総じてそのサイズに合わせて小さいことなども個性的であり、「極楽寺駅」（明治 37 年（1904 年）開業）と「鎌倉高校

⁵⁹ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

前駅」(明治36年(1903年)開業)の2つの駅舎は運輸省(現国土交通省)関東運輸局管轄内の特徴ある駅を選定した「関東の駅100選」に選ばれるなど、江ノ電の駅舎を代表するものといえる。

特に、極楽寺駅は、平成31年(2019年)1月に新駅舎を竣工し、駅前の公衆トイレ・広場の整備がなされているものの、旧駅舎はモニュメントとして保存されている。昭和40年(1965年)の写真からも、旧駅舎が保存されていることが分かる。旧駅舎は、平屋建ての木造建築で、現在は使われていないが、当時の窓口なども残されている。谷戸の緑に包まれて佇む駅舎は風情や安らぎが感じられ、鎌倉を代表する景観を形成している。その周辺には、前述の極楽洞をはじめ、極楽寺、成就院、虚空蔵堂、星ノ井、御霊神社など、観光客に人気の見どころも多い。

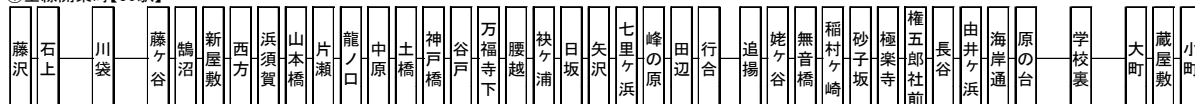


写真2-201 極楽寺駅
(昭和40年(1965年))



写真2-202 極楽寺駅(旧駅舎)

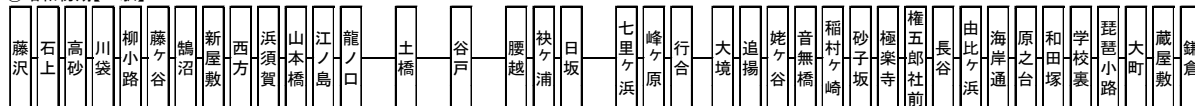
①全線開業時【39駅】



②大正初期【40駅】



③昭和初期【39駅】



④現在【15駅】



※駅については、「昇降場」、「停留所」、「駅」など、歴史上様々な表現が使われているが、ここでは全て「駅」とした。

図2-27 江ノ電の駅の変遷

ウ 活動

江ノ電は 120 年以上にわたり、住民・観光客の移動手段として人々を輸送してきた。藤沢で東海道線、大町（鎌倉）で横須賀線と両終点で鉄道院線（現 JR 東日本線）と接続し、沿線全域が観光地、別荘地という好条件に恵まれていたこともあり、明治 42 年（1909 年）7 月 1 日からは鉄道院との間で片道乗車券を発売、9 月 11 日からは、往復乗車券及び回遊乗車券による連帯運輸を開始している。

このことは、明治 42 年（1909 年）7 月 30 日の「横浜貿易新報」（現神奈川新聞）に、「鉄道院にては、平民的避暑旅行を企て 8 月 1 日の日曜日より毎日曜毎に江の島鎌倉遊覧回遊列車運転するに取極めたるが、是れに付き江の島電鉄会社にも割引券を発売し之れと連絡せしめ…」と掲載されていることから分かる。また、同記事によると「江の島鎌倉遊覧回遊」にあたり、「鎌倉由井ヶ浜及び片瀬海岸へ休憩所を設け海水浴を為す人々の便宜に供し、余興には煙火を打ち揚げ蓄音器を備え置き及び紀念の為め団扇若くは扇子を会員に頒つといふ。」とあり、内閣の直属機関であった鉄道院が積極的にこの地域への観光を推し進めていたことがうかがえる。



写真2-203 七里ヶ浜に沿って走る江ノ電
（明治末～大正）



図2-28 路線図の絵葉書
（明治 44 年(1911 年)）

その後、戦後の高度経済成長の中で、全国各地のローカル電車が周辺の道路開通やバス路線の整備、国民のマイカー指向に押されて苦境に追い込まれ、次々と廃止されていく中、江ノ電もこの波にのまれ、一時は廃止論まで浮上するようになっていた。しかし、鎌倉はこの時期に住宅地としての人気が高まり、沿線に住宅地が増えたことで道路事情に課題を抱えるようになったことから、定時性の高い鉄道が再び見直され、江ノ電は息を吹き返した。

現在の江ノ電は、朝夕の通勤・通学時間帯に沿線住民や学生などが、また平日の昼間や休日には修学旅行生や観光客が年間を通じて利用するなど、昼夜を問わず多くの利用客で賑わっており、地域の人々の足として、また、観光鉄道として鎌倉らしさを形作る大きな要素である。

緑色とクリーム色で塗装されたレトロな車両が富士山や腰越、七里ヶ浜、稲村ヶ崎の海岸線、御霊神社などの沿線の社寺、鎌倉の山々を背景に、あるいは民家の間をすり抜けて走る姿は市民や来訪者に鎌倉らしい情緒を感じさせる景観の一つとなっている。平成26年（2014年）には「明治期の日本における鉄道黎明期の^{れいめいき}雰囲気

を今に伝え、地元密着型の軌道として湘南の風景の一部となっている貴重な土木遺産」として、公益社団法人土木学会が選出する「2014年度選奨土木遺産」にも選出された。

また、通常の車両の運行以外で、特別なデザインや広告を施した車両が運行することがあり、その姿もまた鎌倉独自の景観を生み出している。昭和6年（1931年）に江ノ電開業30周年イベントの一環として運行された初の納涼電車は、夏季限定の青色の電車で、運転席のガラス窓以外の窓は無く、風通しを良くしていた。観光客は納涼電車に乗り、由比ヶ浜と藤沢市片瀬の海水浴場を行き来することができることから、運行を開始するや否や、たちまち人気を博し、鎌倉の夏の風物詩として定着した。納涼電車は、その後戦争で中断してしまったが、平成4年（1992年）に300形の車両に納涼電車のデザインを施し、再現された。また、昭和57年（1982年）の資生堂の広告から始まる広告電車は、今でも数多く運行されている。

近年では、沿線にある長谷寺の本尊造立1300年を記念し、車内を極楽浄土や枯山水をイメージしたデザインを施した「観音電車」が運行されるなど、地域との繋がりのある取組にも発展している。これらの車両が走る姿もまた、鎌倉らしい風景として、地域の人々や鎌倉を訪れた人々に親しまれている。



写真2-204 御霊神社前を通る江ノ電

写真2-205 納涼電車(銀波号)
(昭和12年(1937年))写真2-206 観音電車
(令和3年(2021年))写真2-207 特別仕様の電車
(令和7年(2025年))

江ノ電が地域の交通手段だけでなく、観光鉄道として根付いたことは、近世から鎌倉や江の島が遊山の地として人々の間に定着していたことも一つの理由として挙げられる。すでに「鎌倉遊山にみる歴史的風致」（160 ページ）で記載したとおり、七里ヶ浜から海を挟んで江の島と富士山を望む景観は近世の様々な浮世絵に描かれた。江ノ電の線路が七里ヶ浜を臨む海岸線と並行に敷設されていることによって、稲村ヶ崎駅から腰越駅へと向かう車窓からは、目の前に広がる相模湾、その東に江の島や富士山を望むことができ、今も近世の浮世絵と同じ構図を電車に乗りながら楽しむことができる。



図2-29 歌川広重『相州江のしま詣の図 七里が浜真景』
(弘化年間(1844～1848 年)頃成立)



写真2-208 七里ヶ浜に沿って走る江ノ電

さらに、鎌倉駅から腰越駅まで全ての駅付近に観光名所が所在しており、「若宮大路周辺の営みにみる歴史的風致」（146～148 ページ）で記載したような江戸時代の人々が楽しんだ鎌倉遊山の周遊観光ルートを、江ノ電に乗って楽しむことができる。

年始、ゴールデンウィーク、桜・紫陽花・紅葉の時期など鎌倉の四季折々で、江ノ電に乗車するための観光客が列を成す光景が見られ、単なる移動手段ではなく、江ノ電に乗ること自体が一種の観光となっていることが分かる。

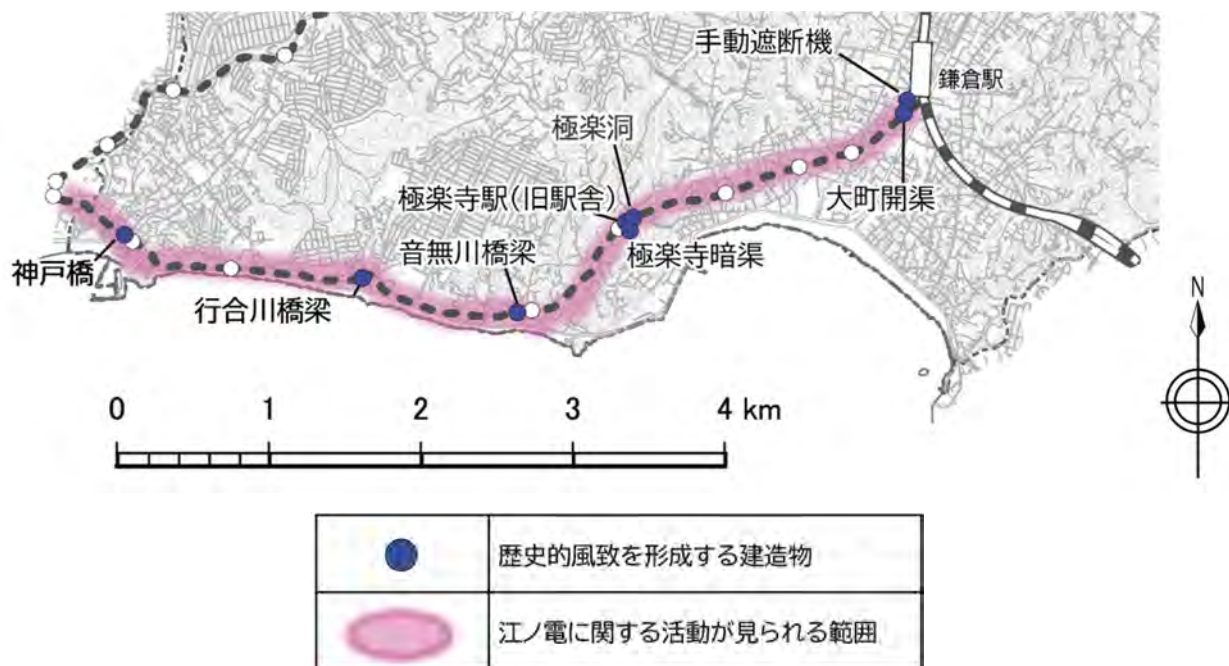


図2-30 周遊観光にはじまる「江ノ電」に関する活動の市街地への広がり

Ⅰ まとめ

風光明媚な鎌倉の景観の中を走り抜ける江ノ電は、車窓から刻々と移り変わる海や山の景観を楽しめ、駅舎・トンネル・橋梁などの個性ある建造物や車両が調和し、独自の魅力を醸し出している。こうした景観と一体となった鉄道の姿は、沿線に暮らす住民にとっては日常の景観であり、来訪者にとっては鎌倉らしさを体感できる象徴的な存在となっている。

江ノ電は観光と日常、景観と暮らし、まちづくりと交通の接点としてこの地に深く根付いており、鎌倉の歴史的風致の一つを形成する存在として、今も人々に愛され続けている。

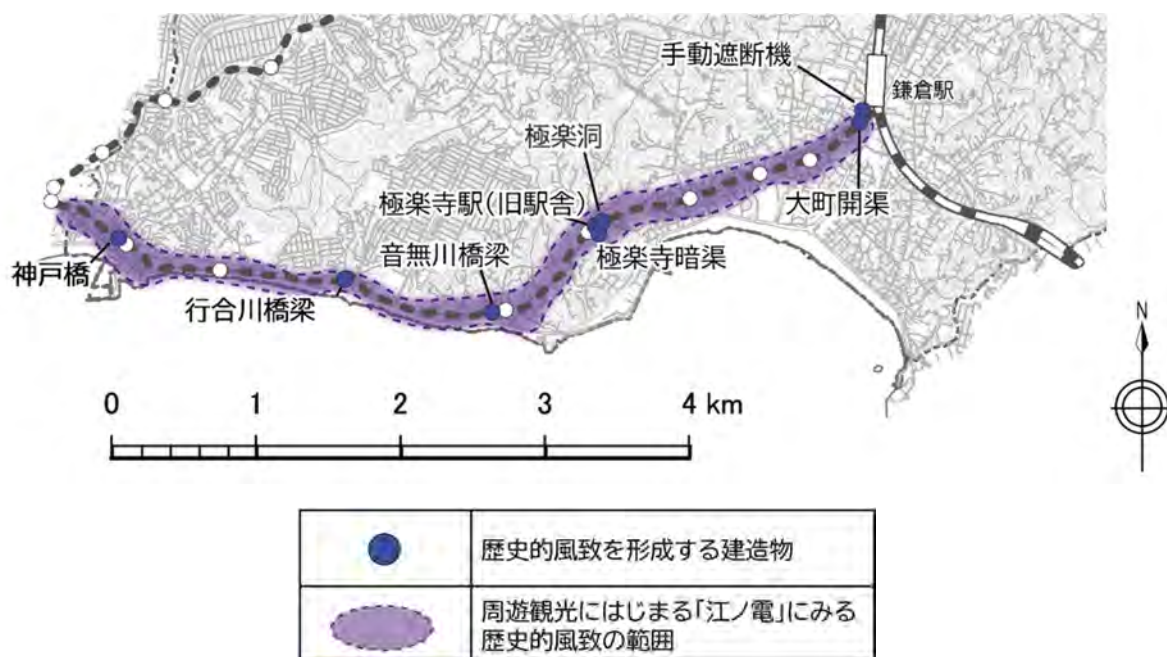


図2-31 周遊観光にはじまる「江ノ電」にみる歴史的風致の範囲図

コラム 地域から愛され続ける車両“タンコロ”

江ノ電では沿線住民の足の確保と観光客の輸送を円滑に行うため、増車対応が求められてきた。これらの需要増に対して、昭和 46 年（1971 年）頃までは、既存 100 形車両の改良や他の電鉄から譲り受けた旧車両を江ノ電に就役させることが多かったが、さらなる需要増が見込まれ、その後、新車両の導入が進められた。

50 年にわたって活躍した 100 形車両（通称「タンコロ」）のうち、鎌倉市に寄贈された一車両は、鎌倉海浜公園において保存され、公園のシンボルとして人々に親しまれており、江ノ島電鉄株式会社が所有する一両は極楽寺の検車区においても動態保存されている。

平成元年（1989 年）から極楽寺検車区で開催される「タンコロまつり」は、鉄道ファンだけでなく、江ノ電の公式キャラクター「えのんくん」会うことを目的とした沿線に住む親子連れなどで大変賑わっている。



写真2-209 100 形車両(タンコロ)

コラム 江ノ電廃線の危機とメディアで描かれた江ノ電

昭和 27 年（1952 年）頃、自家用車を保有している人は少なく、バス利用者が多かったため、江ノ電を廃線にする計画が浮上した。しかし、昭和 30 年代から昭和 40 年代にかけては自家用車の所有者が増え、渋滞などの課題が発生し、バス事業にもそれらの課題が波及した。また、沿線に住宅地が増えたことや、江ノ電沿線を題材としたテレビドラマの影響もあり、江ノ電の乗客は増加に転じ、廃線計画は撤回され、新型車両 1000 形の導入に繋がっていく。その後は「観光電車」として乗客がさらに増加し、人々の移動に不可欠な存在なものとしての存在感を確立した。

具体的には、日本テレビ系ドラマ「俺たちの朝」の放映や、NHK「新日本紀行」で「湘南・電車通り」として江ノ電が取り上げられたことをきっかけとして、江ノ電が再度注目されるようになった。「俺たちの朝」は、極楽寺駅とその周辺が舞台となった。

近年では、フジテレビ系ドラマとして「最後から二番目の恋」が放映され、続編・続々編までが制作された。また、東宝映画「海街 diary」、「Destiny 鎌倉ものがたり」など、沿線や江ノ電そのものがモチーフとなった作品が公開され、それらの影響により、従来の社寺参拝を目的とした観光だけではなく、ロケ地を巡るロケーションツーリズムという新たな観光スタイルも生まれている。

コラム 文化人と江ノ電

湘南の風景とともに走る江ノ電は、鎌倉・由比ヶ浜の地域文化に深く刻まれた歴史の一部である。江ノ電沿線には、明治から昭和にかけて多くの文化人が住み、鎌倉の情景に加えて、江ノ電もその作品に描かれている。

鎌倉に長く住んだ俳人・高浜虚子が「波音の由比ガ濱より 初電車」と詠んだのは、波に寄せる音とともに走る電車の音が、暮らしの息遣いと詩情とを結びつけた瞬間である。この一句は虚子旧居近くに句碑として残され、風景としての江ノ電が時間を超えて受け継がれている。

太宰治^{だざいおさむ}の短編『狂言の神』には、江ノ電に乗った描写がある。主人公が入水を図ったのちに「ふらふら鎌倉行の電車に乗った」、「ごっとな、ごっとな、のろすぎる電車にゆられながら…」と、主人公の心の静謐^{せいひつ}でも激情でもない感情と江ノ電のゆったりと走る様が混ざり合い、象徴的に描かれている。

鎌倉には、高浜虚子や太宰治をはじめ、多くの文化人が住み、訪れ、創作の場としてこの沿線の風情を愛した。当時と変わらない姿で走り続ける江ノ電は、文化人たちが見たであろう景色を今に残し続けている。



写真2-210 高浜虚子句碑と江ノ電

(6) 別荘文化に由来する歴史的風致

ア はじめに

明治時代から大正時代にかけて、避暑・避寒・保養の適地として知られるようになった鎌倉では、この地に別荘を構えた人々の中で生まれた価値観が広がり始め、知識、道德、習慣、作法、生業、芸術といった人々の精神や営みに大きな影響を与えるようになった。

別荘地化に端を発し、地域固有の自然的・歴史的背景や人的・物的交流を通じて洗練されたこれらの文化は、鎌倉のまちの発展に大きく寄与した「別荘文化」といわれており、現代の鎌倉に住まう人々の趣向やライフスタイルにも、その諸相を見ることができる。

イ 別荘文化の背景

(ア) 別荘地としての鎌倉

明治9年（1876年）、東京医学校に招かれたドイツのエルウィン・ベルツ博士は、予防医学の観点から「保養の思想」を普及させた医師であり、早くから海浜保養地（別荘地）としての湘南の地域特性を認めた一人であった。ベルツは明治13年（1880年）の日記に、健康管理を依頼されていた知人の子供たちを片瀬へ海水浴に行かせたことや、七里ヶ浜海岸が自分にとっては日本で一番美しい地点であると感じていることなどを書き残している。

また、ベルツ博士が招かれた東京医学校で当時校長を務めていた医政家の長與専斎は、明治17年（1884年）に鎌倉の海を海水浴の適地として紹介するとともに自身も由比ガ浜地区に別荘を持ち、明治20年（1887年）には海浜のサナトリウムである「^{かいひんいん}海濱院」の建設に深く携わるなど、海浜保養を推奨した。



写真2-211 由比ヶ浜(明治時代)



写真2-212 三橋旅館

しおとうじ

当時の海水浴は、医療行為として「潮湯治」とも呼ばれ、決まった時間に海に入ることを繰り返すというものであったが、明治 18 年（1885 年）に、長谷で営業していた三橋旅館が「海水浴御馳走」という広告を「東京横浜毎日新聞」に掲載し、明治 21 年（1888 年）には、前年に療養所としてオープンした「海濱院」が「海濱ホテル」へ衣替えすると、商売として海水浴客を受け入れる体制が整い、医療としての海水浴は瞬く間にレジャーとして定着していった。



写真2-213 海濱ホテル

当時この地域は、水の便が悪く農業には不向きとされ、価値の低い土地であったが、小高く展望が良いこと、松林が陽を遮って涼しい風が吹くこと、何より海水浴に便利なことなど、夏向きの別荘地としては適地であり、次第に土地の価値が見直されるようになっていった。

さらに、明治 20 年（1887 年）に東海道線横浜・国府津駅間が開通し、明治 22 年（1889 年）に当時軍港のあった横須賀までの連絡路として横須賀線が開業すると、土地の利用価値が一気に高まり、明治 32 年（1899 年）には、鎌倉駅の近傍に御用邸が造営されたこともあいまって、東京に住まう政界、財界、官僚、軍人、皇族、華族などが競って別荘を構えるようになった。現存する鎌倉文学館（旧前田家別邸）、平成 30 年（2018 年）4 月に閉館した旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）、旧華頂宮邸、古我邸（旧莊邸）などは、その代表的な建物であり、この他にも往時をしのばせる別荘建築が数多く残されている。

また、別荘地としての人気が高まる中、一時的な滞在とは別に、この地を常住の地を選び、新しく転入してくる富裕層も含めて、彼らはいっしょに「別荘族」とも呼ばれるようになった。そして、彼らの生活に密着していたのが、下馬交差点から長谷寺に至る由比ヶ浜大通り沿いや坂ノ下地区などに展開した商店であった。当時別荘に暮らしていた人々を相手に展開していった商業が、別荘文化の発展とともに拡大していき、今では、この地域は、商店街として活気のあるまちなみを形成しており、別荘文化が花開いた明治～大正時代からの商店もいくつか残っている。

別荘文化が花開いた鎌倉には、「日本基督教団鎌倉教会附属ハリス記念幼稚園」や「日本基督教団鎌倉教会会堂」、「鎌倉聖ミカエル教会聖堂」などのキリスト教関連の施設が残されている。これらは、鎌倉に別荘を持った人々の中に、キリスト教の信者が多くおり、鎌倉の地で礼拝を守りたいとの願いから建てられたものであるといわれている。現存する建物は、いずれも関東大震災以降の建築であるが、伝道の歴史はさらに古く、明治 30 年（1897 年）頃といわれており、別荘の人々との関わりがうかがえる。

(イ) 鎌倉山における分譲別荘地開発への広がり

海浜部から始まった鎌倉の別荘の歴史は、鎌倉市のほぼ中心に位置する「鎌倉山」での高級分譲地の開発にも繋がっていくこととなる。当時の実業家であった菅原通済は、ドイツ人の貿易商クルト・マイスナーの着想から、眺望の良いこの丘陵を別荘地にしようと考え、その構想は、最小一区画 500 坪という高級住宅地の分譲販売へと発展していった。大正 15 年（1926 年）に我が国初の自動車専用道路である「大船江の島自動車専用道路（京急道路）」の建設が認可されると、通済は道路建設と併せて乗合自動車の運行を計画するとともに、深沢村の山林を「鎌倉山」と命名し、昭和 4 年（1929 年）から分譲を開始した。鎌倉山には、現在も分譲当初に建てられた住宅や大区画の敷地が残されており、往時と変わらぬ高級住宅街の佇まいをうかがい知ることができる。

また、分譲当初に植えられたと伝わる数百本もの桜の木がまちのいたるところに立ち並び、特に住宅街の中央を走る通称「バス通り」の沿道に並ぶ桜並木は、「かまくら景観百景」に選ばれ、毎年桜の時期ともなると桜並木のトンネルを目当てに多くの人々が訪れる。

(ウ) 鎌倉と文化人

別荘地としての鎌倉の発展は、明治中期から大正初期まで続き、大正元年（1912 年）には町の総人口の約 3 分の 1 が転入した人々で占められ、一部の有力者が有志による地域団体を組織し、より積極的に町政へ参加するようになった。「鎌倉同人会」はその象徴的な組織であり、現在もなお、その活動は続いており、令和 7 年（2025 年）に設立 110 周年を迎えた。

また、鎌倉は明治から昭和にかけて、「鎌倉文士」と呼ばれた多くの作家や詩人、歌人、俳人などが移り住み、文学との関わりが深いまちである。明治・大正期の文学史上、重要な位置を占めた文学同人誌『白樺』は、そこに集る同人の多くが富裕階級の出身であり、長與専斎の子である長與善郎の家などを拠点に活動していた。その後、関東大震災で東京が大きな被害に遭ったことをきっかけに、文学者の一部が温暖な気候に恵まれ、歴史と緑に包まれた環境に惹かれ、東京から鎌倉へと移住した。大正 13 年（1924 年）、14 年（1925 年）に相次いで鎌倉に移り住んだ里見弴と久米正雄は、昭和 11 年（1936 年）に「鎌倉ペンクラブ」を発足させ、永井龍男、大佛次郎、川端康成、横山隆一、小林秀雄、島木健作、川喜多長政、川喜多かしこら 42 人の作家、文化人が名を連ねた。また、久米正雄と大佛次郎は、昭和 9 年（1934 年）から約 30 年にわたって続いた、夏の風物詩「鎌倉カーニバル」を発案するなど、地域に大きく貢献した。こうして昭和の文壇史に大きな足跡を残す「鎌倉文士」たちを生み出した鎌倉は、今も多くの文学者を受け入れ、新しい文学をこの地から世に送り出している。

平成 2 年（1990 年）に市教育委員会が発行した『鎌倉文学碑めぐり』によると、鎌倉に

は七十数基に及ぶ文学碑があり、その中には由比ガ浜地区周辺に住んだ俳人の高浜虚子庵趾・句碑、長谷寺境内に建つ久米正雄の胸像など、鎌倉文士ゆかりのものが多く、これら市内各所に点在する文学碑からも鎌倉が文学のまちといわれる由来が感じられる。加えて鎌倉文士の作品の中には、鎌倉のまちを取り上げたものも多く存在し、作品に登場する市街地を歩くことで、当時のまちの息づかいを今も感じることができる。日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成は長く鎌倉に住んだことから、『山の音』で長谷の自宅付近をモデルとするなど、作品にも多く鎌倉を登場させている。

ウ 建造物

(ア) 歴史的風致の形成を担っている建造物

a 別荘建築物

(a) 鎌倉文学館(旧前田家別邸)

鎌倉文学館は、昭和 11 年（1936 年）に旧加賀藩前田家第十六代当主前田利為^{まえだとしなり}によって建てられた鎌倉の別荘を代表する建物の一つといえる。設計は渡辺栄治、施工は竹中工務店によって建てられた。海岸線と並行に走る由比ヶ浜大通りを山側に折れた高台に位置し、眼下に相模湾を一望することのできるこの建物は、佐藤栄作元首相が別荘として利用したほか、作家三島由紀夫の小説『春の雪』の一場面にも登場する。昭和 58 年（1983 年）7 月、前田家より市が譲り受け、昭和 60 年（1985 年）10 月に鎌倉文学館として開館した。登録有形文化財である。



写真2-214 鎌倉文学館(旧前田家別邸)

この建物は、1 階は鉄筋コンクリート造りで、2 階と 3 階は木造である。外壁は当時鎌倉の別荘建築物に多く用いられた二丁掛タイルで、半六角形の張り出し窓に、半円形の欄間の飾り窓、パラペットの装飾、ベランダの手すり等洋風デザインの導入をみることができる。一方、瓦葺きの切妻屋根と深い軒の出などの和風デザインも見られ、全体的には和洋折衷の外観を呈している。内部は、アールデコの様式が随所に見られ、当時入手が難しかった大理石を用いた玄関や暖炉、床のモザイク模様の寄木貼り、ステンドグラス等はこの建物の重厚さを伝える要素となっている。

(b) 旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）

旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）は、鎌倉文学館の南西の閑静な住宅街に佇む小さな洋館である。明治 41 年（1908 年）に株式仲買人として財を成した福島浪蔵別邸として建てられ、当時は現存の洋館部分の北側及び北東部に和風棟が建ち、広大な敷地に庭園が設けられていたと考えられている。これらの建物は、大正 10 年（1921 年）に実業家の諸戸清六別邸となり、関東大震災に遭っても建物は健在であったが、昭和 51 年（1976 年）頃から建物が使用されなくなると、広大な土地はそのほとんどが分割され、23 の宅地に姿を変えてしまった。昭和 55 年（1980 年）に寄贈



写真2-215 旧諸戸邸

（旧鎌倉市長谷子ども会館）

を受けた鎌倉市がここを鎌倉市長谷子ども会館とするため改修工事を始めた際には、和風棟はほとんど姿を消しており、代わりに市は洋館部北側へ鉤型に建物を増築し、洋館と一体化させて子ども会館とした。子ども会館としての役割を終えた現在は、増築部分を解体し、施設の保存と民間利活用の実現に向けた耐震改修および敷地整備を推進している。これに伴い、現存する「創建当初の 2 階建て洋館、その北側の廊下部分、および蔵」についても、当時の意匠を忠実に復元する改修工事を進行中である。

この建物の外観は、バルコニーの柱にギリシア建築の様式を取り入れ、メダリオン飾りが付けられており、ドア枠と窓枠には手の込んだ装飾が施されるなど、きわめて華麗である。また、内部も古典的な雰囲気が感じられ、明治期の貴重な遺構として、登録有形文化財となっている。

(c) 古我邸

扇ガ谷にある古我邸は、鎌倉文学館、後述する旧華頂宮邸とともに鎌倉三大洋館と呼ばれている。大正 5 年（1916 年）、三菱合資会社の専務理事であった荘清次郎の別荘として建てられ、その後、日本土地建物を経営していた古我貞周が昭和 12 年（1937 年）に取得した。首相を務めた近衛文麿や浜口雄幸なども別荘として利用し、現在は飲食店として活用されている。屋組



写真2-216 古我邸

みに釘打ちされている棟札の表面に「奉齋 屋船久々能知神 大地主神 屋船豊受姫神 手置帆負命 彦狭知命 大正五年丙辰七月十一日」、裏面に「願主 荘清次郎 設計主任 櫻井工學博士 現場主任 南邦政 請負人 植村喜三郎 棟梁 加藤源治 副 杉崎榮太

郎」と墨書されていることから大正5年（1916年）に建築されたことが分かる。

この建物は、宅地部分だけでもおよそ 2,300 m²、山林部分を含めると 5,000 m²にも及ぶ扇ガ谷の一つの谷戸全体を敷地として建っており、延床面積も 500 m²を超える稀に見る大規模別荘である。西側が洋風の主要部、東側が和風のサービス部分に大きく分けられ、八角形の突出部分の屋根の反りを除けば、内外ともすべて直線・平面で構成されており、非常にシンプルで簡素な造りといえる。ほぼ外壁の全面を覆うシングル（柿板）張りが特徴的で、見かけ上は正方形に近い柿板で覆われているように見える。屋根もまた天然スレート葺であり、全体が鱗で覆われたような印象のある意匠をしている。鎌倉の別荘地時代を伝える貴重な遺産の一つである。

(d) 御成小学校旧講堂・旧鎌倉図書館

現在も鎌倉駅の西側一帯に地名として残る「御成町」は、この地に御用邸が存在していたことに由来する。御用邸の存在は、高級別荘地として認知されていた鎌倉にとって、ステータスシンボルともいえるものであった。

その後、御用邸は関東大震災によってほとんどの建築物が倒壊したため廃止となり、昭和6年（1931年）に小学校等の教育施設建設用地として鎌倉町に払い下げられた。

御用邸の跡地に現存する御成小学校旧講堂は、洋風建築と和風建築のそれぞれの特徴を取り入れ、昭和8年（1933年）に建てられた木造平屋建てであり、屋根は鋼板葺で建築面積は 684 m²となっている。

旧講堂の近傍には、市民の寄付によって建てられた旧鎌倉図書館も残されている。旧鎌倉図書館は、昭和11年（1936年）10月に開館した2代目鎌倉図書館の建築を基本とし、令和5年（2023年）3月に改修された建物で、建築竣工年や設計者、施行者が定かではないが、開館日より、昭和11年（1936年）には建っていたことが分かる。建物は、木造（一部鉄筋コンクリート造り、鉄骨造り）2階建て、洋小屋組の造りをしている。改修後も、モダンな意匠に和風の味わいを加えた竣工当時の建築物の外観と



写真2-217 御成小学校旧講堂



写真2-218 御成小学校校門の冠木門



写真2-219 旧鎌倉図書館

構造形式の特徴をよく留めている。昭和初期の鎌倉中心部における、関東大震災後の復興の様相を今に伝える建築物として、鎌倉らしい景観の形成に大いに寄与している。

さらに、これらの建物に挟まれるように往時の面影を残す御成小学校校門の冠木門^{かぶきもん}が建っており、校内の豊かな緑と相まって、道行く人の心を和ませる風景を形成している。登録有形文化財である。

(e) 旧華頂宮邸^{きゆう か ちようのみやてい}

旧華頂宮邸は、文治4年（1188年）創建の浄妙寺や竹林の庭で有名な報国寺^{ほうこくじ}にほど近い、衣張山東側の静かな谷戸の奥に位置する登録有形文化財である。

昭和4年（1929年）春、華頂博信侯爵邸として建てられ、当時から常住の住宅として用いられていたというが、華頂夫妻が生活したのは数年のみであった。その後、たびたび持ち主が変わり、昭和42年（1967



写真2-220 旧華頂宮邸

年）頃実業家の松崎貞治郎が購入、昭和45年（1970年）頃から松崎夫婦が常住するところとなり、敷地の最南端の茶室、門及び和風平屋がこのとき東京から移築された。

外観は、洋風民家に設けられるハーフティンバースタイルで、洋風の門、敷地内の樹木、幾何学式庭園と一体となり、往時の華やかな暮らしを彷彿とさせる。緑に囲まれた落ち着いたのある谷戸の景観を形成する貴重な洋風建築物及び庭園で、平成19年（2007年）には、「日本の歴史公園100選」にも選ばれている。

b 別荘文化に関連する商店・施設

(a) 寸松堂^{すんしょうどう}

寸松堂は、昭和11年（1936年）9月1日起工、同年12月25日竣工であることが、現存する建築届出書で確認されている。設計・施工者は西井喜一と記載されているが、喜一の子息である西井正二もまた大工であったことから、父子で建設業を営んでいたといわれている。主屋と蔵が登録有形文化財である。

3階建ての塔の頂部に相輪^{そうりん}を載せた姿は、寺院建築を思わせるが、窓は城郭建築に見られる武者窓^{むしやまど}であり、寺院建築と城郭建築が町家と合体したような建物である。由比ヶ浜大通りのほぼ中間



写真2-221 寸松堂

地点に位置し、三方向を通りに開いた角地に建っていることから、その特徴的な外観は周辺のランドマーク的な存在となっており、由比ヶ浜大通りを行き交う人々がしばしば足を

止めて建物に見入っている。

(b) 白日堂^{はくじつどう}

由比ヶ浜大通りと交わる県道 32 号（藤沢鎌倉線）にも鎌倉彫の商店兼住宅である「白日堂」が建っている。江ノ電の長谷駅と鎌倉大仏が鎮座する高德院とを結び、年間を通じて多くの観光客が行き交うこの通りにおいて、白日堂は、一際目を引く存在である。設計・施工を担当したのは、寸松堂と同じ西井父子で、寸松堂をモデルに建築されたと考えられ、より民家に近い外観であるが、寺院と城郭の意匠を加えた独特の風貌が保たれている。1 階の床面積は 127.02 m²、中 2 階は 36.63 m²、2 階は 41.54 m²である。棧瓦葺（一部垂鉛引鉄板葺）の入母屋で、片側が妻切となっている。昭和 15 年（1940 年）の建築⁶⁰である。



写真2-222 白日堂

c 鎌倉山に関連する建造物

(a) 榑亭^{らいてい}

「榑亭」は、相模湾を見下ろす敷地とその門構えから、個々の区画が広大な鎌倉山にあって今もなお人目を引く存在である。榑亭は、鎌倉山の分譲を行った菅原通済の父であり、鉄道事業家・土木技術者として知られる菅原恒覧^{すがわらこうらん}の別荘として建てられたものである。当初は「清香園^{せいこうえん}」と称しており、昭和 7 年（1932 年）発行の「鎌倉山住宅株式会社分譲地略図（以下「分譲知略図」という。）」に建物の配置がひととき詳しく書かれている



写真2-223 榑亭

ことから、いち早く具体の建築計画が固まっていたことがうかがえる。恒覧は、当時の戸塚（横浜市）において関東大震災で倒壊した農家を昭和 4 年（1929 年）7 月に購入して移築し、同じく震災で倒壊した鎌倉の青蓮寺の玄関の材料を買い付けてこれも移築した。恒覧自らが著し、昭和 10 年（1935 年）9 月 20 日に発行された『清香園誌^{せいこうえん し}』には、2,400 坪と記されている広大な敷地内に、当時造営された建物がいくつも示されている。登録有形文化財である。

⁶⁰ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

建物は、前述のとおり大規模養蚕農家と寺院の玄関を改造し、合体させ、1階を増築して2階建てにしたてあげたものである。個々の素材は江戸時代に遡るものもある。もとは土間であった洋室は、高い梁を交差させた天井をもち、壁はサークル塗りの粗面モルタル仕上げで、西壁には9枚のステンドグラスが置かれ、和洋の混在した雰囲気醸し出されている。

(b) 扇湖山荘

鎌倉山に所在する建物の中でもひととき存在感を有する「扇湖山荘」は、製薬会社「ワカモト製薬」創業者の長尾欽彌^{なが お きん や}の別荘として建てられたもので、分譲地略図の東南に「長尾」の文字が見えることから、分譲当初から建設が予定されていたことが分かる。

扇湖山荘という名は、建物から一望できる相模湾が扇型をした湖のように見えることから付けられたものであり、東京大学名誉教授で建築史などが専門の鈴木博之が平成14年（2002年）に著した『長尾欽彌旧別邸 扇湖山荘』によると、飛騨高山から昭和9年（1934年）に移築した民家に手を加えた建物と、高名な作庭家によってデザインされた日本庭園を持つ戦前の和風文化を画す代表的な大型遺構である。建物は、地下階がある2階建てで、鉄筋コンクリート造りの地下室の上に移築改造された民家が載っており、1階の南面・東面はテラスとし、砕いた陶器が敷きつめられている。太い梁や入母屋屋根など民家の構造を残しながら、近代和風建築の要素も備えている。

平成22年（2010年）10月に鎌倉市が寄付を受けた。



写真2-224 扇湖山荘



写真2-225 扇湖山荘から望む海



図2-32 鎌倉山住宅地株式會社分譲地略図

(c) 鎌倉山石柱（鎌倉山ロータリー）

鎌倉山のロータリーの中央にある「鎌倉山」と刻まれた石柱がある。これは、関東大震災で倒れた鶴岡八幡宮の三ノ鳥居の1本を譲り受け、昭和44年（1969年）に建国記念日創設を記念して菅原通済が建てたものである。石柱の下には、鎌倉山の開発や石柱の建立について記された石碑（昭和44年（1969年）銘）がある。



写真2-226 鎌倉山石柱

(d) 鎌倉山碑

鎌倉山碑は、石組みの礎石に乗った高さ4m余りもある大きな石碑であり、昭和10年（1935年）に建立されたことが刻まれている。鎌倉山の開発について、その歴史が刻まれている。



写真2-227 鎌倉山碑

d 鎌倉の文化人に関する建造物

(a) 旧大佛次郎茶亭^{おさらぎじろう}

旧大佛次郎茶亭は若宮大路とその東側に並行に走る辻説法通りに挟まれた、ゆるやかにカーブする細い路地沿いに位置し、落ち着いた色調の板塀は、郷愁をいざなう路地景観を形成している。ここには、鎌倉文士の一人、大佛次郎が多くの仲間と交流した茶亭が残る。建物は、大正8年（1919年）頃に建築⁶¹されたとみられる。茅葺屋根を持つ数寄屋風の平屋建てである。鎌倉風致保存会の指定保存建造物になっている。



写真2-228 旧大佛次郎茶亭

(b) 吉屋信子記念館^{よしやのぶこ}

吉屋信子記念館は、鎌倉文学館から200m程南東に進んだ閑静な住宅街に位置する。建物は、近代数寄屋建築の第一人者である吉田五十八^{よしだいそや}が昭和37年（1962年）、吉屋に「奈良の尼寺のように」と望まれて設計を行ったと伝わる。木造平屋建てで、平面西には、コンクリートブロック造りの倉庫が付属する。和風要素を巧みに取り入れた建築である。



写真2-229 吉屋信子記念館

建物内部の書斎は吉屋信子の生前のままの形で保存され、春と秋に一般公開を行い、直筆原稿や愛用品を展示している。市民の学習施設として、昭和49年（1974年）の開館以来、多くの人々に親しまれ、利用されている。登録有形文化財である。

⁶¹ 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(c) 旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）

旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）は、寿福寺の東側から横須賀線の踏切を渡り、小町通りへ至るまで続く窟小路に面し、その黒い板塀は、鎌倉の小路の景観をより印象深いものとしている。ここは生涯を通じて外国映画の輸入と配給、海外への日本映画紹介などに情熱を注いだ川喜多長政・かしこ夫妻の住んだ地である。敷地内にある^{さんかわら ぶ よせむね}棧瓦葺き寄棟の木造平屋建ての和風建築は、東京にあった哲学者の和辻哲郎の住宅を昭和36年（1961年）に移築⁶²したものである。東京にあった和辻哲郎の住宅も、もとは移築されたものであり、昭和13年（1938年）に江戸後期創建と見られる神奈川県大山の麓にあった古民家を解体し、東京に移築したと伝わる。旧市街地の谷戸の高台に建つこの建物は、背後の山並みと棧瓦葺きの屋根が調和し、地域を代表する魅力的な景観を形成している。平成6年（1994年）に市に寄贈された後、東側にあった母屋は、川喜多映画記念館として建て替えられ、旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）とともに映画文化の歴史を伝えている。



写真2-230 旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）

(d) 鎌倉国宝館

鎌倉国宝館は、鶴岡八幡宮の境内にある鎌倉市の博物館である。大正12年（1923年）の関東大震災により、鎌倉の社寺等の建物が倒壊し、貴重な文化財が損失したことから、不時の災害から鎌倉の文化財を保護し、また、鎌倉を訪れる人々が文化財を見学できるよう一堂に展示できる施設として設立が計画された。

鎌倉同人会が中心になり、鎌倉町とともに設立にあたり、鎌倉同人会をはじめとする多くの人々の寄付により、鎌倉市域に所在する寺社から多数の宝物の寄託を受け、昭和3年（1928年）4月3日に開館した。

建物は、登録有形文化財であり、鉄筋コンクリート造りの高床式で校倉造風となっている。設計は、鎌倉同人会員であった岡田信一郎で、外観を奈良の正倉院に模し、内部は鎌倉時代の寺院建築の手法が用いられている。寄棟瓦葺き屋根の中央部には、小屋裏位置に採光用の^{こしや ね}越屋根を隠し、さらに内部では^{こうりょうたいへいづか}虹梁大瓶束形式で採光用越屋根の棟を支える造りとなっている。



写真2-231 鎌倉国宝館

⁶² 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(e) 日本基督教団鎌倉教会会堂

日本基督教団鎌倉教会会堂の歴史は古く、鎌倉に当教会の伝道が開始されたのは明治 30 年（1897 年）に遡る。

専用の木造の会堂が建てられたのは明治 40 年（1907 年）5 月 18 日で、設計は当時の牧師である鵜飼猛、施工は戦前の鎌倉大工の代表である三橋直吉であった。しかし、この会堂は大正 12 年（1923 年）の関東大震災で倒壊し、しばらく仮会堂の期間を経て、現在の会堂は大正 15 年（1926 年）の建築⁶³である。現会堂は創建後、便所と塔屋 4 階部の増築がなされ、微細な補修・改修を受けたのみで創建当時の姿を保っている。



写真2-232 日本基督教団鎌倉教会

正面のトレーサリーを伴った大きな尖頭^{せんとう}アーチ窓など初期ゴシック的スタイルを持ち、戦前のプロテスタント教会会堂の代表例の一つとなっている。鎌倉教会現会堂は鎌倉における最初期の鉄筋コンクリート造りとされているが、鉄筋コンクリート造りであるのは四周の壁のみで、小屋組は鉄骨造、内部間仕切、2 階の床等は木造であり、一種の混構造ということもできる。外壁は目地を切って石造に擬すなど、様々な構造を用いて石造教会堂を模しているが、これらの構造材料は違和感を抱かせずに溶け合い、統一的なゴシック調を生み出している。

(f) 日本基督教団鎌倉教会会堂付属ハリス記念幼稚園

ハリス記念鎌倉幼稚園は明治 43 年（1910 年）創立で、市内で最も古い幼稚園である。

園舎は大正 14 年（1925 年）の建築⁶⁴で、「梅鉢型園舎」という、中央に遊戯室があり、それを囲むように舞台・教室が配置されている。

「梅鉢型園舎」の他の特徴として、鉄骨トラス構造の屋根部分で、44 尺の径間を縦横に行き交うキングポストトラスで支えられていることが挙げられる。弦材が水平でなく、中央が高くなっており、内部空間にもドームのような求心性を表現しようとした意図がみられる。それを可能にしたのは、鉄筋コンクリートと鉄骨という新しい技術であり、こういった技術面においてもこの建物は貴重な遺構であるといえる。

写真2-233 日本基督教団鎌倉教会
付属ハリス記念幼稚園

⁶³ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

⁶⁴ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(g) 鎌倉聖ミカエル教会聖堂

鎌倉聖ミカエル教会聖堂は昭和8年（1933年）に建築⁶⁵された。その後増改築が行われ、現在、創建当時の姿をとどめているのは聖堂前部のみである。

現聖堂は押縁下見板張りの簡素な和風建物である会館及び牧師館とともに建築された。その後、昭和13年（1938年）に小町通り側の隣地を購入し、現在のような敷地形態となった。昭和40年（1965年）には、和風の会館及び牧師館が大幅に改造され、ほぼ現在のような姿となった。このとき聖堂部も西側に礼拝準備室が付け加えられ、東側の礼拝準備室は倍近くに広げられた。さらに昭和41年（1966年）、敷地の北東隅に2階建ての牧師館が竣工したが、その後現在の建物の老朽化に伴い、平成12年（2000年）に会館と牧師館を改築し、現在に至っている。

なお、この教会の名称であるが、当初は鎌倉聖公会と称していたが、昭和17年（1942年）からは日本基督教団鎌倉小町教会と称すことになり、そして昭和23年（1948年）からは再び日本聖公会鎌倉聖ミカエル教会と改称して現在に至っている。

外観は、下見板張りの外壁に両開き窓を配した素朴なものだが、ブラケット、三連アーチ窓、垂木下端部の繰形に手の込んだ細工の美しさが見られる。内部はみごとな技巧の天井や家具、照明器具などが、創建当初のまま残されている。この聖堂を守ってきた信徒の知恵と鎌倉の大工の昭和初期の力量を示す貴重な建物である。



写真2-234 鎌倉聖ミカエル教会聖堂

(イ) その他の建造物

本計画において、後述の活動が認められず、歴史的風致の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、別荘地として栄えた鎌倉らしい景観を形成する建造物を抜粋して記載する。

a 坂井家住宅和館・洋館

扇ガ谷の奥に所在する坂井家住宅和館・洋館は、東京大学理学博士であった坂井英太郎の鎌倉別邸として昭和2年（1927年）に建築された。

建物は、和館部分と洋館部分からなり、和館は、木造2階建てで、南面して建ち、正面東寄りに玄関を構え、背面東寄りに家政部を張出す。和瓦葺き屋根であり、寄棟・入母屋・切妻など複雑な屋根形状をしている。南面



写真2-235 坂井家住宅和館・洋館

⁶⁵ 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

の開口を広めて採光するほか、玄関や取次の間、背面廊下を広めに作られた別邸建築となっている。

洋館は、和館の南東隅に接続して建つ木造 2 階建ての建物である。敷地の高低差を利用し、洋館の 2 階に和館の 1 階が接続されている。外観は、スレート葺き屋根、モルタル塗りシン吹付とし、2 階出窓の上下に見切を入れるなど、和館と対照的である。2 階を洋風の応接室として、洋館併設住宅の特徴を伝える。和館、洋館ともに登録有形文化財である。

b かぶらぎきよかた 鏑木清方記念美術館

鏑木清方記念美術館は、川喜多映画記念館から南に 100m 程進んだ場所にある。鏑木清方は女性の美や庶民生活などを題材とした近代日本画の巨匠で、文化勲章を受章している。この地は鏑木清方の自宅があった場所で、平成 6 年(1994 年)に市に寄付され、美術館として作品を公開している。なお、清方も前述の吉屋信子記念館の設



写真2-236 鏑木清方記念美術館

計者、吉田五十八と懇意にしており、戦前東京に住んでいた清方の自宅は吉田五十八の設計だった。昭和 29 年(1954 年)鎌倉・雪ノ下に居を構える際、画室は吉田五十八の設計を再現したといわれている。美術館として整備されるにあたり、正面玄関と画室は昭和 29 年(1954 年)当時の部材をそのまま使用し、再現した。

c 旧神奈川県営湘南水道鎌倉加圧ポンプ所

主要地方道藤沢鎌倉線の大仏坂トンネルの鎌倉側すぐ手前の東側に建つ旧神奈川県営湘南水道鎌倉加圧ポンプ所は、神奈川県営水道の最初の事業である湘南水道の加圧ポンプ場で、相模川から取水した水を逗子・横須賀方面に供給するため、昭和 11 年(1936 年)4 月に建設されたものである。建築物は、昭和 41 年(1966 年)4 月から平成 14 年(2002 年)2 月まで鎌倉市の大仏坂体育館として用いられた。神奈川県営の



写真2-237 旧神奈川県営湘南水道
鎌倉加圧ポンプ所

水道事業の最初の水道施設で、別荘などに水を供給する戦前の鎌倉の水道施設の希少な遺構であり、登録有形文化財である。また、全面スクラッチタイル張りの外観は、大仏坂トンネル近辺における特徴的な景観を形成しており、大仏坂トンネルとも相まって、鎌倉の戦前の産業遺構群を形成している。現在は、レストランとして活用されている。

エ 活動

(ア) 建築物の保存・継承活動

前述した建造物は、多くの別荘建造物、別荘文化にまつわる建造物が老朽化や維持管理の困難さから失われていく中で、市民の活動により守られてきた。鎌倉に点在するこれらの建造物は、単なる建築物としての価値にとどまらず、そこに関わる人々の手入れや営みによって、静かにその存在感を放っている。市街地のなかにあっても一際目を引き、時の重なりや文化の層を感じさせるそれらの風景は、「いざ鎌倉」～歴史と文化が描くモザイク画のまちへ～という日本遺産のストーリーにおける象徴的な風景となっている。

a 旧華頂宮邸の保存・継承活動

旧華頂宮邸では、平成8年（1996年）5月、市が譲渡を受け、庭園の一般公開等を行っている。その中で、市と連携し、旧華頂宮邸の維持、管理、美化、邸内公開日やイベント開催のボランティア活動を行っているのが宅間ボランティアの会である。定期的に行われている庭園整備のときなど、ボランティア活動をしている様子が周辺の道路から見る事ができる。

この宅間ボランティアの会は、旧華頂宮邸が位置する宅間谷戸の親睦団体で、作家の林房雄が会長を務めた「宅間会」を前身とした市民団体であり、鎌倉市が旧華頂宮邸を譲渡された平成8年（1996年）から、旧華頂宮邸の維持管理活動に携わっている。宅間会の正式な設立時期は分からないが、昭和16年（1941年）発行の『文藝春秋』に寄せた林房雄の文章内で、隣組の制度によって宅間谷戸の住民が親睦を深めている様子が書かれている。その後、宅間会と称されるようになり、平成14年（2002年）に現在の宅間ボランティアの会となった。

当初の住環境の向上等を目的とした市民活動から、近年は、宅間谷戸を学区にもつ中学校の学生を対象とした「景観ウォーク」を開催し、宅間谷戸の歴史、文化、自然を伝える活動も行っている。イベント当日は、宅間ボランティアの会の人々に連れられて、地域について学ぶ子供たちの真剣な様子を見ることができる。

旧華頂宮邸だけではなく、宅間会や宅間ボランティアの会が守り伝え続けている宅間谷戸の自然環境は、旧華頂宮邸の背景に緑が美しく映える景観そのものを守ることにも繋がっており、往時の情景を今に残している。



写真2-238 宅間ボランティアの会の維持管理活動の様子

b その他の建造物における保存・継承活動

旧大佛次郎茶亭は、大佛次郎が亡くなった後も野尻家が所有し、昭和 58 年（1983 年）に鎌倉風致保存会の保存建造物に指定し、鎌倉風致保存会の協力を受けながら保存と春と秋の一般公開を行っていた。しかし、次第に維持管理が困難になり、所有者が令和元年（2019 年）に売却を決断し、なかなか買い手が見つからない中、解体の可能性もあった。その際、貴重な遺構がなくなる危機感から個人の手が挙がり、有志が集まり、「一般社団法人大佛次郎文学保存会」が令和 2 年（2020 年）に継承した。その後、同団体と鎌倉市風致保存会により、春と秋の公開が行われており、公開日には旧大佛次郎茶亭を見ようと市内外から人々が集まってくる様子が見られる。

また、坂井家住宅は、平成 25 年（2013 年）に鎌倉風致保存会に寄贈後、ボランティアによる庭園、敷地の整備が行われており、活動の日には、庭園の整備をしている様子を周辺の道路から見ることができる。



写真2-239 旧大佛次郎茶亭の公開の様子



写真2-240 庭園整備の様子

（イ）別荘文化を支えた人々の営み

鎌倉に一時的に滞在する人や常住するようになった「別荘族」を相手とした由比ヶ浜大通り沿い、坂ノ下、長谷近辺の商業活動では、別荘を持つ顧客への品質の高い商品の提供や「御用聞き」と呼ばれるサービスの提供など、商店の創意と工夫の積み重ねによる独自の商業体系が発展した。明治 45 年（1912 年）に大橋良平が著した『現在の鎌倉』には、「毎年七月中旬か又は八月上旬頃より、九月の下旬頃迄の様に、必ず此地に来て別荘或は貸別荘又は貸間に避暑する人が多い、之れ等の人を別荘客、避暑客と云ふて、鎌倉土着の諸商人貸家業者は崇拜するのだ、それでも鎌倉人士の財源は全く此避暑客別荘客にあるからだ、鎌倉は此夏期をとしてあるので一部の営業者の収入が一年の諸経費に充てられるのである。」とあり、当時の商店が別荘に滞在する顧客向けの営業で潤っていたことが分かる。



写真2-241 配達の小僧さん
(昭和 12 年(1937 年))

現在もこの地域では、米、酒、うなぎ、蒲鉾、鎌倉彫などの老舗が高品質な商品の製造・販売を続けており、古くからの建物で営業を行っている店もある。これらの商店では、得意先への商品の配達など、「御用聞き」に由来する配達の文化が残っている店舗もあり、配達を行っている様子を時折見ることができ、かつての別荘地としての風情を感じ取ることができる。

例えば、由比ヶ浜大通り沿いに店を構える「柴崎牛乳店」は、初代店主の柴崎梅吉が、明治 23 年（1890 年）に横須賀から鎌倉村に移転し、当時この地で牛を飼いながら、別荘で過ごす人々に牛乳を配達していたという。

鎌倉を代表する土産物であり、伝統的工芸品である鎌倉彫も、鎌倉の別荘地化と深く関わりあい、発展していったものの一つである。それまで主に寺院の仏具や茶道具を作成していた仏師たちは、廃仏毀釈の風潮などによって造像の需要が激減した後、別荘を構えた上流階級の人々の需要に合わせ、家具調度品や工芸品の製作を主体とするようになり、それが鎌倉彫として浸透、発展していった。この地に残る「寸松堂」、「白日堂」のような店舗兼工房は、こうした歴史を今に伝える鎌倉彫の商店兼住宅として貴重な存在といえ、建物自体が伝統を物語る存在であり、外からも歴史と文化の気配が漂う。時折、通行人が足を止めてショーウィンドウに飾られた鎌倉彫を鑑賞する姿を見ることができる。

寸松堂は、大正 10 年（1921 年）の創業であり、大正 13 年（1924 年）に現在の寸松堂が建っている場所の近傍に店を構え、その後移転した。工房を備えた店舗兼住宅において営まれている鎌倉彫の製作・販売は、特徴的な建物と調和することによって、鎌倉彫の歴史と伝統を今に伝えている。重厚な店内に足を踏み入れると茶托や鏡類、銘々皿、盆、菓

子器など様々な作品が取り揃えられている。

白日堂の創業は、昭和9年（1934年）に遡る。創業者の伊志良不説は、寸松堂2代目の佐藤泰岳の実兄であり、泰岳は佐藤家の養子として寸松堂を継いでいる。不説は戦前、主に茶道具を製作し、戦後は若い弟子たちの育成や工房・店の経営に努め、厳しい時期を乗り越えてきた。こうした折、横須賀に進駐した将兵が鎌倉を訪れた際、鎌倉彫を購入するようになり、中にはテーブルを注文する者もいたという。現在、白日堂では、女性の店主が彫るオーダーメイドのブローチ等が人気を博している。

これらの店舗以外にも別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗が複数あり、別荘文化の記憶を今に伝えている。

表2-10 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗

店名	所在地	創業時期	備考
寸松堂	笹目町	大正時代	鎌倉彫工房
白日堂	長谷三丁目	昭和初期	鎌倉彫工房
柴崎牛乳店	長谷二丁目	明治中期	食料品店
三留商店	坂ノ下	明治中期	食料品店
内田理容館	由比ガ浜一丁目	大正時代	理容院
山源 石渡源三郎商店	長谷二丁目	明治初期	乾物屋
紅家美術店	長谷三丁目	明治初期	骨董品店
つるや	由比ガ浜三丁目	昭和初期	飲食店
井上蒲鉾店	由比ガ浜一丁目	昭和初期	食料品店



図2-33 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗(長谷駅周辺)



図2-34 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗(由比ヶ浜駅・和田塚駅周辺)

(ウ) 鎌倉山の住民等によるまちづくり活動

鎌倉山においては、住宅地としての開発を進めた企業により、下水道や浄化槽などのインフラや生鮮食料品店、警備小屋など居住に関する施設整備が進められ、また、「交詢閣（鎌倉山ロッジ）」と呼ばれる帝国ホテル直営の社交場が開設されるなど、高級感のあるイメージが浸透していった。前述の榎亭や扇湖山荘はまさに当時の鎌倉山のイメージを体現する建物である。



写真2-242 鎌倉山ロッジ

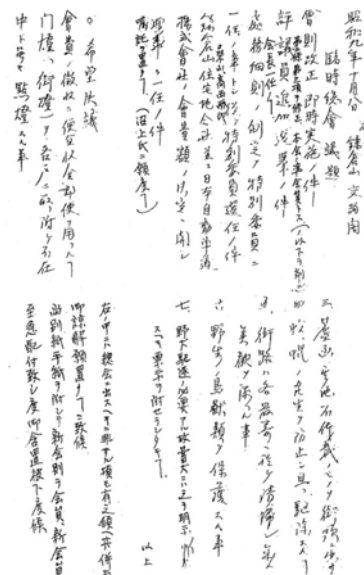


図2-35 「昭和九年十月八日臨時總會のメモ」

そして、この地を「理想郷」として作り上げようとする意識は、企業側だけでなく住民側にも十分理解され、鎌倉山が住宅地として開発されたときから住まう人々が、昭和7年（1932年）8月に「友美会」と称する自治組織を設立し、主体的なまちづくりを進めていった。昭和9年（1934年）の友美会の臨時總會のメモからも、友美会の活動をうかがい知ることができる。そしてその活動が、今の住民による鎌倉山のまちづくりにも引き継がれている。

友美会は、住民相互の親睦を図り、自治の精神に基づき、鎌倉山住宅地を理想郷にするという趣旨で設立された。新しい居住者に対しては、その住居を建てる際、自然環境との調和を図ることや他家の眺望の妨げにならないような建物の設計を行うことや、生け垣や自然石を利用し環境の美化に配慮すること等を指導していた。現在も、鎌倉山の随所で、このような指導によって生まれた生垣や自然石の壁を見ることができる。

昭和15年（1940年）に出された内務省訓令により友美会は町内会へと形を変え、住民の生活も戦争によって大きく変化することとなるが、肩書敬称にとらわれることなく、なお住民間の結びつきは強くなっていった。その後、大きな戦災を受けることなく自然の佇まいが残された鎌倉山においては、昭和22年（1947年）に町内会令が廃止された後も地域における自治組織は存続し、発足当初の友美会のようにまちづくりに対する意識の高さがあり、この地になじまない宅地造成の計画が持ち上がった折には、住民が一致団結し、事業者と直接折衝するため現場へと赴くこともあった。

昭和45年（1970年）、鎌倉市において初めて市街化区域と市街化調整区域の区域区分（線引き）が行われた際、市は国勢調査における人口集中地区の数値基準に従い、この地域を市街化調整区域ではなく市街化区域にすることを提案したが、当時の自治組織である「鎌倉山町内会」は、「鎌倉山住民を分断する」という理由から市街化区域化に反対する

意思を表明した。その後も、更新が行われる5年ごとに、その判断を住民にゆだねてきたが、住民の判断は一貫して市街化調整区域のままでいることを望むというものであった。

そして、これまで鎌倉山の景観を守り、引き継いできた先人の意識や活動は、現在この地域に住む人々にも受け継がれており、平成12年（2000年）には、鎌倉山町内会が主体となってまちづくりを行うための「鎌倉山のまちづくり計画⁶⁶」を策定し、快適な居住環境の保全と創造を自主的に進めている様子が見られる。

この計画では、建築物や工作物の外観に関し、原色や刺激的な色彩は施さないこと、道路との境界に塀を設置するときにはできるだけ生け垣を選択すること、止むを得ず既存宅地を分割する際には一定の敷地面積を確保するなどの具体的な取組が掲げられており、良好なまち並み景観を維持するため、町内会が中心となって様々な活動を行っている。

鎌倉山において大規模な宅地開発事業が計画されると、開発事業者は計画概要を町内会へ連絡し、これを受けた町内会は、1区画の敷地面積を60坪から100坪程度確保するよう事業者へ要請を行うほか、開発予定地の周辺住民へ計画概要を知らせ、住民の意向が開発事業者へ伝わるよう調整を行っている。また、分譲当初に植えられたと伝わる桜の木がまちのいたるところに立ち並び、鎌倉山を象徴とするものの一つであるが、特に住宅街の中央を走る通称「バス通り」の沿道に並ぶ桜並木は、毎年桜の時期になると桜のトンネルとなり鎌倉山を彩る。この桜並木を保全するため、バス通り沿いに新たに住宅を建設する場合は、鎌倉山町内会では、5mごとに1本の桜の木を植えるよう施主に求める他、開発工事に伴い、止むを得ず桜の木を伐採する場合は、必ず失われた本数以上の桜の木を区域内に植えるよう事業者と協議を行っている。現在も、新しく植えられた桜の木と分譲当初に植えられ樹齢を重ねた木が作る桜並木のトンネルからは、鎌倉山の住民が桜のある風景を大切にする思いが感じられる。

また、鎌倉山町内会が所有する「鎌倉山集会所」の建替えにあたっても、周囲の景観に馴染む集会所とするため、住民有志により検討委員会が結成され、地域にゆかりのある建築家数名から設計プランの提案を受けて住民投票で設計者を決定し、平成27年（2015年）に建替えが完了した。

この他、町内会だけではなく様々な自主グループが良好なまち並み景観を守る取組を行っている。住宅地西側のロータリー付近では、住民が定期的に道路の清掃活動を行うとともに、花壇に季節の花を植え、まちに彩りを添えている。また、鎌倉山の分譲当初に住宅地の鎮守として奉斎された「鎌倉山神社」や、「鎌倉山集会所」の敷地内などでも住民による自主的な清掃活動が行われている。

⁶⁶ 「鎌倉山のまちづくり計画」とは、鎌倉市まちづくり条例に基づき、一定の地区を対象として快適な居住環境の保全と創造を図ることを目的として、まちづくり市民団体が策定する自主まちづくり計画である。

個々の住宅でも、鎌倉山の自然が豊かな住環境を維持するため、家の敷地内に多くの植栽を施している。夏前や秋口には、住宅で植木屋による庭木の選定や植栽の整備が行われており、脚立や剪定道具を用いた作業の様子を見ることができる。鎌倉山において広大な敷地をもつ榑亭では、真竹の保護や外来植物の除却など、鎌倉山本来の植生にこだわった庭木の管理を行い、住環境の向上に努めており、日々、植栽を管理している様子を見ることができる。

このような住民の地道な努力の結果、まちに新しく建てられる建築物も既存の榑亭や扇湖山荘をはじめとした大区画の住宅が醸し出すまち並みに溶け込むよう配慮がなされ、良好なまち並み景観や住環境が次の世代に引き継がれている。



写真2-243 鎌倉山の桜並木
(昭和 45 年(1960 年))



写真2-244 鎌倉山の桜並木

(工) 鎌倉の文化人にまつわる活動

a 文化人による鎌倉のまちづくり

令和7年（2025年）に設立110周年を迎えた「鎌倉同人会」は、陸奥宗光の子で外交官として活躍した陸奥広吉、洋画壇の大御所黒田清輝など、鎌倉在住の錚々たる人々が発起人となり設立された。彼らは鎌倉をさらに住みよいまちにすることや、観光地としても内外にもっとアピールすべきと考え、同じ志をもつ人々に呼びかけ、会を構成していった。鎌倉同人会では、創立当初から昭和にかけて鎌倉駅舎改築の要請、鎌倉国宝館の建設のほか、関東大震災のときには救護薬品の寄贈や復興の援助を行うなど、まちづくりに係る事業を積極的に進め、現在も歴史文化講座の開講や石碑の建立・保全など、鎌倉の文化の発展・向上を目指し、活動を続けている。



写真2-245 海浜ホテルの石碑

また、鶴岡八幡宮で毎年8月に行われる「ぼんぼり（雪洞）祭」（詳細は「社寺における祭礼・行事や信仰にみる歴史的風致」（66 ページ）及び「若宮大路周辺の営みにみる歴史的風致」（146 ページ）参照）は、「鎌倉ペンクラブ」のメンバーが中心となってぼんぼりを並べたことが始まりである。鎌倉に住んだ文化人により始まったこの行事は、当初のぼんぼりは200個ほどだったが、現在では、約400個のぼんぼりが鶴岡八幡宮の境内に並び、鶴岡八幡宮とその周辺を暖かい光で照らす光景が見られる。

旧大佛次郎茶亭を建てた大佛次郎と久米正雄が発案した鎌倉カーニバル（前述）は、鎌倉を国際都市にしようと昭和9年（1934年）から始められ、戦争のためしばらくの間途絶えたものの、昭和22年（1947年）の再開通知が残っており、その後昭和38年（1963年）に取りやめになるまでの間、鎌倉の夏を盛り上げた。現在、その精神を受け継ぎ、平成28年（2016年）から「鎌倉市民カーニバル」が、毎年5月に行われている。当日になると仮装をした人々によるパレードが鎌倉市役所から海に向けて行われ、楽しそうに歩く人々の姿や歓声が鎌倉駅から由比ヶ浜海岸まで続き、賑わいを見せている。



写真2-246 鎌倉カーニバル
（昭和9年（1934）年）



写真2-247 鎌倉市民カーニバル

b 文化人と基督教の広がり

別荘地化が進むことで、鎌倉ではキリスト教徒たちが増えていった。鎌倉へ移住、もしくは別荘を構えた文化人をはじめとするキリスト教徒たちの信仰の中心として、日本基督教団鎌倉教会や鎌倉聖ミカエル教会は、重要な役割を担っていた。

(a) 日本基督教団鎌倉教会の活動

昭和6年（1931年）に本間俊平が著した『本間全集 第5巻』には、日本基督教団鎌倉教会の講演記録があり、当時の活動をうかがうことができる。

現在は、毎週日曜朝の主日礼拝をはじめ、クリスマス、イースターなど、教会暦に基づいた年中行事も行われ、礼拝やイベント時に流れるオルガンと聖歌隊による音楽の響きは、教会の外を歩く人にも届き、教会の周辺は神聖な雰囲気で包まれる。



写真2-248 日本基督教団鎌倉教会堂のクリスマスマーケット

(b) 日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園における幼児教育

明治43年（1910年）に創立された日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園は、鎌倉の幼児教育の先駆けである。昭和初期の給食風景の写真から、昔から数多くの園児を迎え入れていたことが分かる。現在も静かにたたずむ園舎からは幼稚園に通う子供たちの歌声や活気が外からも感じられ、歴史的なまちなみと調和した鎌倉ならではの雰囲気を醸し出している。

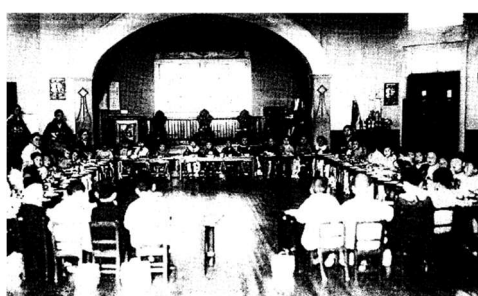


写真2-249 給食風景(昭和初期)



写真2-250 ハリス記念幼稚園の活動

(c) 鎌倉聖ミカエル教会の活動

鎌倉聖ミカエル教会の聖堂内には、昭和8年（1933年）付けの「聖別の証」が掲げられており、当時から活動を行っていたことが分かる。

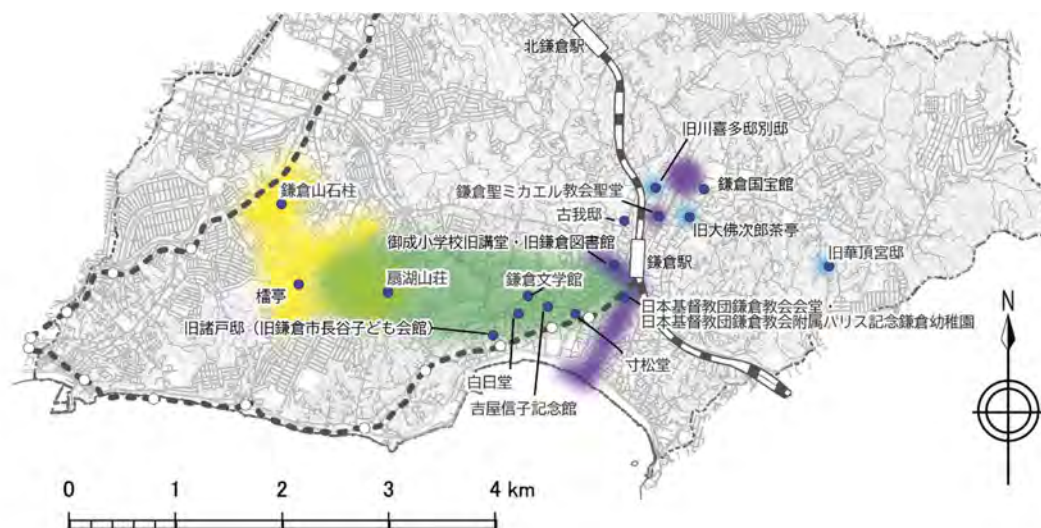
現在は、日曜日の礼拝以外にも、地域住民や観光客向けに、教会見学や建物公開、チャリティバザー、音楽コンサートなどを開き、地域に開けた教会としての取組を行っており、イベント時は、賑やかな声が建物の外まで聞こえてくる。



写真2-251 鎌倉聖ミカエル教会聖堂の礼拝の様子
（昭和40年（1965年））



写真2-252 鎌倉聖ミカエル教会聖堂に
おけるクリスマス礼拝の様子



	歴史的風致を形成する建造物
	建造物の保存・継承活動が見える範囲
	別荘文化を支えた人々の営みが見える範囲
	鎌倉山の住民等によるまちづくり活動が見える範囲
	鎌倉の文化人にまつわる活動が見える範囲

図2-36 別荘文化に由来する活動の市街地への広がり

表2-11 別荘文化に由来する主な活動の年表

活動種別	活動場所	現在の活動主体	昭和9年	昭和19年	昭和29年	昭和39年	昭和49年	昭和59年	平成6年	平成16年	平成26年	令和6年	現在	
			1934年	1944年	1954年	1964年	1974年	1984年	1994年	2004年	2014年	2024年		
建築物の保存・継承活動	旧華頂宮邸	宅間ボランティアの会	宅間会による住環境向上活動											

オ まとめ

鎌倉という地において別荘文化が栄えた背景には、多くの歴史的遺産を有し、古都の風情を湛え、温暖な気候に恵まれた海浜保養の適地であったことや、都心に近いという立地に加えて、横須賀線の開通により鎌倉に当時の日本の政財界の中心人物や文化人等の別荘が多く建てられ、それにより、地域の人々の営みに変化していったことがあげられる。

大正時代に起きた関東大震災をきっかけに、鎌倉は別荘地ではなく常住の地へと変わっていったが、この地で育まれた別荘文化は、ここに住まう人や訪れる人の間で引き継がれており、往時をしのばせる歴史的な建造物を核とした別荘地としての風情や趣が、今もまちの至るところに息づいた歴史的風致となっている。

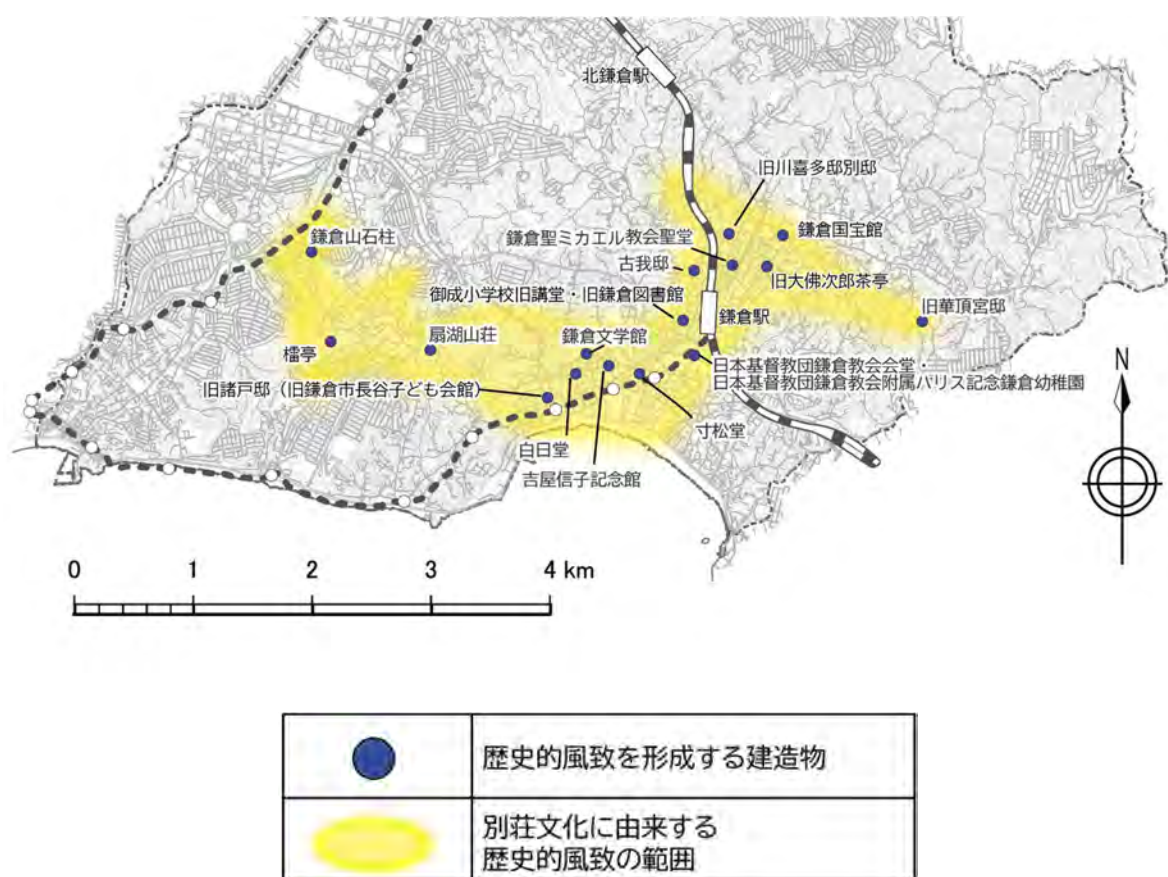


図2-37 別荘文化に由来する歴史的風致の範囲

(7) 歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致

ア はじめに

ここでいう鎌倉の山稜部とは、中世の時代において、まちの中心部を三方から取り囲む山々の連なり及びそのバッファーとなる周辺地域を合わせたエリアを指すものである。当時の山稜部は、防御性に富み、機能的に整備された都市構造を担う重要な役割を果たしていた。今日の山稜部は、山稜中腹に抱かれた社寺等の歴史的遺産とその背景となる緑が調和し、一体となって、鎌倉特有の歴史的な景観を形成している。



写真2-253 鎌倉市の市街地・山稜

鎌倉時代、陸上交通の要衝として山稜の尾根を垂直に掘り下げ、その底面を路面とした「^{きりどおし}切通」が整備された。また、切通や山腹の崖などには、「やぐら」と呼ばれる横穴式の中世墳墓及び供養施設と考えられる遺構が多く存在し、県・市指定史跡に指定されているものもある。

このように鎌倉の山稜部には、鎌倉時代に武家が山に手を加えて造った切通ややぐら、中世以降の古道などの多く文化財・歴史的建造物が点在しており、山稜部そのものが後世に守り伝えていかなければならない文化財であるともいえ、鎌倉の歴史が形成される上での物理的な基盤となっていることも、山稜部そのものが昔と変わらぬ形で守られてきたことの大きな理由である。

イ 保存活動のきっかけとなった御谷騒動

鎌倉では、山稜の中腹にある社寺とその背景となる緑、そして、周囲の市街地が調和し、一体となって鎌倉特有の景観を創造し、古都として守るべき「歴史的風土」を形成している。

古都保存法は、この「歴史的風土」の保存を目的とし、昭和41年（1966年）に制定された法律である。この法では、「歴史的風土」を「歴史的な建造物や遺跡などと、それを取り巻く樹林地などの自然物環境が一体となって古都らしさを醸し出している土地の状況」と規定しており、社寺などの歴史的建造物と背後の自然的環境を一体として保存していくこととしている。

鎌倉の山稜部の保全活動が盛んになり、かつ古都保存法制定のきっかけとして、御谷騒動がある。

鎌倉は、我が国が高度経済成長期を迎えた昭和30年代中頃から「昭和の鎌倉攻め」といわれる宅地造成の波に飲まれていった。

鎌倉地区西側に隣接する七里ガ浜地区や円覚寺裏山の明月谷北側など、これだけで約112ha、3,000余区画の宅地が造成され、戦後鎌倉の都市化に拍車を掛けていった。そして、この波は、古都鎌倉の聖域ともいえる鶴岡八幡宮の裏山「御谷」にまで迫ることとなる。



写真2-255 航空写真
(昭和31年(1956年))



写真2-256 航空写真
(昭和63年(1988年))



写真2-254 航空写真
(令和元年(2019年))

鶴岡八幡宮西側の谷戸である御谷は、鶴岡二十五坊跡があった遺跡で、風致上や歴史上、また植物学上からみても鎌倉において最も重要であり、鎌倉の都市構造の要でもあるこの地を宅地にするということは、鎌倉そのものの破壊ともいえる行為であった。昭和39年(1964年)にこの宅地造成の計画を知った地域住民は、「鎌倉の自然を守る会」や、昭和26年(1951年)から市民による政策を提言する団体として活動していた「鎌倉三日会」などの市民団体の協力を得て、後に「御谷騒動」と呼ばれる宅地造成計画への反対運動を展開していくこととなる。

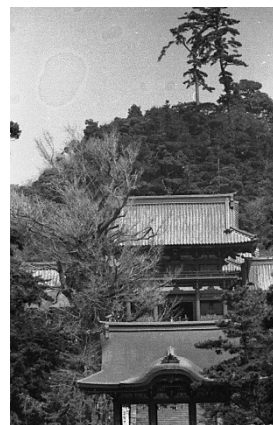


写真2-257 鶴岡八幡宮
(昭和36年(1961年))

明治以降、鎌倉に別荘を持つ人々の中には多くの文化人が含まれており、英国で生まれた自然・歴史的建物の民間保護団体「ザ・ナショナルトラスト」など海外における自然保護の動きについても明るく、文化財や自然保護の意識も高かった。また、同じく鎌倉に住む学者たちも、200種の植物が茂る自然林を守るだけでなく、鎌倉の史跡と景観が、日本のみならず世界全体にとっても貴重であることなど、それぞれの意見を述べ、多くの識者が市民による反対運動の推進を支えた。宅地造成計画に反対する婦人会が



写真2-258 鶴岡八幡宮

駅前街頭署名活動を行うと、日頃から文化財保護の重要性を訴えていた大佛次郎をはじめ、里見弴、今日出海、小林秀雄、横山隆一なども署名運動に参加し、わずか一週間で20,000人を超える署名が集まるという成果を上げた。また、開発現場においては一般市民、

学者、文化人、僧侶までがブルドーザーの前に立ちはだかり、ついには警察が出動するという切迫した状況にまで至った。この結果、1年間にわたり関係者による粘り強い話し合いが行われた末、宅地造成を推し進めても予定の利益が得られない程の条件が付されて開発が許可されたことから、事業者が計画を断念するに至り、さらに、このときに設立された日本初のナショナルトラスト団体といわれる鎌倉風致保存会が、市民等からの寄付金をもとに宅地造成予定地の一部の買収を行ったことで御谷騒動は終息を迎えた。

鎌倉の山稜部では、これまで、古都保存法の厳格な運用と市民の意識や活動に支えられ、山稜の樹林と一体となった歴史的環境が保全できており、山稜部は、歴史的遺産と調和し、特有の古都の景観を形成する緑の源となっている。

ウ 建造物

三方は山、一方は海に囲まれた地形を有している鎌倉では、市街地と社寺、そしてその背景にある山稜が一体となった鎌倉ならではの景観を形成している。山稜そのものが、鎌倉のまちを形作る大切な構成要素である。また、山稜部には、切通ややぐらなどの多くの文化財があり、鎌倉のまちの一部として、また、鎌倉の歴史を伝える文化財として重要な役割を担っている。

（ア）切通

陸上交通の要衝として鎌倉の出入口にあたる山稜部に切通が造られた。中世において切通は、鎌倉と外部を結ぶ連絡路として存在するだけでなく、防衛上の要衝でもあり、源頼朝は、切通等、鎌倉と外部との往来口付近には有力な御家人を移住させていたと伝えられる。北条氏もこの基本的な姿勢を踏襲し、それぞれの要所に北条氏又は一門ゆかりの有力な一族を居住させていた。

後に「七口」あるいは「七切通」と称されるようになった、名越切通、朝夷奈切通、巨福呂坂、亀ヶ谷坂、仮粧坂、大仏切通、極楽寺坂切通のうち、6つの切通は、鎌倉の地勢とその外部との連絡状況を示す重要な史跡であることから、それぞれ切通路とその周辺の丘陵部を含む範囲が国指定史跡に指定されている。

a なごえ 名越切通・大切岸

鎌倉南部の丘陵地を北西－南東方向に通る切通で、史跡指定範囲は、鎌倉市と逗子市にまたがっており、鎌倉市域では約6.2haが指定されている。

往時は、鎌倉と三浦半島を結ぶ要路で、周辺には、平場や切岸、やぐら等の遺構が分布

しており、鎌倉市域の平場には、市の文化財に指定されている石廟（石造墳墓堂）が2基存在している。

切り開かれた明確な時期は不明であるが、『吾妻鏡』の天福元年（1233年）8月の条に「名越坂」の記述があることから、13世紀前半には整備されていたと考えられる。

また、日蓮ゆかりの法性寺（逗子市）のある山腹には大切^{おおき}岸^{きり}という山腹を垂直に削った人工の崖が300mほど続いている。平場が数段ひな壇上に造られている場所もあり、発掘調査で中世からの石切り場であったことが分かっている。



写真2-259 名越切通

b 朝夷奈切通^{あさいな}

鎌倉東部の丘陵の谷筋を東西方向に通る切通で、史跡指定範囲は鎌倉市と横浜市にまたがっており、鎌倉市域では、約7.7haが指定されている。切り取られた岩肌が道と小川を挟み、両側から壁のようにせまるような形をしている。

平成11年度(1999年度)～12年度(2000年度)に実施された切通周辺部の詳細分布調査では、多数のやぐら群、切岸、削^{さく}平地^{へいち}等の遺構が確認された。



写真2-260 朝夷奈切通

『吾妻鏡』によると、仁治元年（1240年）に造営が決定され、その翌年に第三代執権北条泰時の監督のもとに工事が進められており、建長2年（1250年）には補修工事が行われている。

朝夷奈切通は、鎌倉と金沢を結ぶ幹線道路として整備され、鎌倉に物資を供給するうえで重要な交通路であった。特に塩の運搬において重要な役割を担っていた。

室町時代以降も利用されており、江戸時代には、鎌倉遊山などで鎌倉と江戸の往来が盛んになり、江の島、鎌倉、金沢八景のある六浦^{むつうら}をつなぐ道として頻繁に道の補修が行われた記録が残る。幕末から明治時代の頃には、峠に旅人をもてなすための茶店も設けられており、主要交通路として定着していたと考えられている。今でも切通の両側にそそり立つ切岸に当時の面影を感じることができる。

c 巨福呂坂 こぶくろ

往時は、鎌倉の中心部にある鶴岡八幡宮の西側と、建長寺門前を結んでいた要路であった。約2.7haが史跡に指定されている。

『吾妻鏡』では、嘉禎元年（1235 年）に「小袋坂」において鎌倉幕府第四代将軍藤原頼経の病氣平癒を祈る「四角四境祭」が行われたとの記述があるため、13世紀前半には整備されていたと考えられる。

鶴岡八幡宮西側の県立近代美術館別館前を通して北鎌倉へ抜ける現在の県道が明治 19 年（1886 年）に開かれたため、旧道は現在途中で行き止まりとなっており、通り抜けができなくなっているが、旧道の傍らには江戸時代の庚申塔や道祖神が残っており、当時の姿を想起できる。



写真2-261 巨福呂坂

d 亀ヶ谷坂 かめがやつ

鎌倉中心部の東西方向へ北に伸びる丘陵地を南北方向に通じ、扇ガ谷と山ノ内を結ぶ切通で、約 3.9ha が史跡に指定されている。武蔵（現在の東京・埼玉ほぼ全域に含めた地域）に通じる鎌倉の北の出入口であり、軍事的にも経済的にも重要な幹線道であったと考えられる。現在でも日常的に使用されている。

『吾妻鏡』には、建仁 2 年（1202 年）に第二代将軍源頼家が山ノ内に出かけた帰りに「亀谷辺」を通っていることが記されており、13 世紀前半には道が存在したと考えられる。



写真2-262 亀ヶ谷坂

e 仮粧坂

鎌倉西部の南北に伸びる丘陵の尾根に交差するように通る道で、現在の源氏山公園を頂上として北の扇ガ谷に繋がる「仮粧坂」、南の佐助に繋がる「七曲坂」及びその交差部から西に向かって伸びる道により構成されており、約 10.9ha が史跡に指定されている。

藤沢から武蔵方面に通じる道で、今も昔の面影を残している。平成7年度(1995年度)及び同12年度(2000年度)に実施した発掘調査の結果、山稜部において多数のやぐら群、火葬遺構、切岸、堀切、削平地、石切場跡等の遺構が確認された。

『吾妻鏡』では、建長3年(1251年)に鎌倉中で商売を認められた7か所の一つとして挙げられており、13世紀には商業地区として栄えていたようである。元弘3年(1333年)5月、新田義貞による鎌倉攻めの際に軍の主力を向けたので激戦地となった。

現在は坂を上ると鎌倉幕府末期に後醍醐天皇の側近として鎌倉幕府倒幕に尽力した日野俊基を祀る葛原岡神社のある源氏山公園に至る。

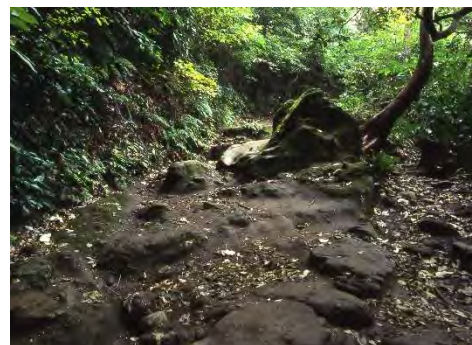


写真2-263 仮粧坂

f 大仏切通

鎌倉西部の丘陵の尾根筋に沿った南側斜面を北西－南東方向に通る切通で、往時は鎌倉から藤沢方面へ通じる要路であった。約 2.1ha が史跡に指定されている。大仏切通の東に隣接する常盤の地には北条氏の館があり、防衛拠点としても要所であったと考えられる。

道の両側に高い絶壁のような崖が切り立っている険しい山道で、江戸時代から明治時代にかけて何度か整備がされた。

常盤口付近の一段高くなった崖には、やぐらがいくつかあり、やぐらの中には五輪塔などもある。



写真2-264 大仏切通

g 極楽寺坂切通

7つの切通のうち最も西側に位置する極楽寺坂切通は、坂ノ下から極楽寺、七里ヶ浜、片瀬方面へ抜ける道であり、鎌倉・京都往還の重要な出入口であった。

極楽寺の門前まで続く坂道は「極楽寺坂」とも呼ばれている。この切通がいつ整備されたのかは分かっていないが、江戸幕府が編纂した地誌『新編相模国風土記稿』の明治8年(1875年)の写本には、極楽寺の開山忍性によって切り開かれたと書かれている。また、

『太平記』には、新田義貞がこの切通から鎌倉に攻め込んだが、北条軍により侵入が防がれ、稲村ヶ崎に回ったという記述がある。

昔の切通は、今の成就院境内の高さのあたりを通る傾斜が急な細い崖路であったが、大正10年（1921年）に自動車の通行を可能にするため、10m以上大きく掘り下げられ、現在はその原型を留めていない。その後、昭和の時代に行われた工事により、道幅も広く、傾斜も緩やかな現在の姿となった。



写真2-265 昭和の工事の写真
(昭和48年(1973年))



写真2-266 極楽寺坂切通の写真

(イ) やぐら

「やぐら」とは、鎌倉を中心とした地域に分布する、山稜の中腹に造られた横穴式の中世墳墓で、武士や僧侶など支配層の埋葬や供養の場として造られたと考えられ、常滑焼や瀬戸焼の壺に入れられた火葬骨が五輪塔、宝篋印塔、板碑などと共に納められているものもある。

その成立年代は、鎌倉時代後半から室町時代ごろと推定されることから、鎌倉が都市として機能していた時期に形成されたことがわかる。都市が発展し、人口が数万人から十万人とも推定されるほどに人口が集中する中、平地面積が少なく、利用できる土地に制限があった鎌倉において、地形を生かした墓の形であった。

周辺の植物に覆われ、ひっそりとたたずむやぐらは、中世の人々の営みを感じることができ、鎌倉の歴史を色濃く残している貴重な遺構といえる。

代表的なものとして、鎌倉市内では、次の表のやぐらが知られている。

表2-12 代表的なやぐら

名称	成立年代（推定）	概要
瑞泉寺裏山やぐら群 （国指定の史跡瑞泉寺境内）※	鎌倉時代後半～室町時代	瑞泉寺の裏山、天園ハイキングコース上に位置するやぐらである。
高時腹切りやぐら （国指定の史跡東勝寺跡）※	鎌倉時代後半～室町時代	東勝寺跡にあるやぐらで、新田義貞の鎌倉攻めの際に、鎌倉幕府第14代執権北条高時らがこのやぐらで自害したとの伝承から、この名が付いたとされる。
明月院のやぐら（国指定の史跡明月院境内）※	鎌倉時代後半～室町時代	明月院の開山堂左手にあるやぐらで、間口約7m、奥行6m、高さ3mと鎌倉で最大級のやぐらである。
綱引地蔵やぐら（国指定の史跡浄光明寺境内・冷泉為相墓）※	鎌倉時代後半～室町時代	浄光明寺の裏山に位置するやぐらで、やぐら内に安置されている石造地蔵菩薩坐像は綱引地蔵と呼ばれ、鎌倉二十四地蔵の一つに数えられている。
地蔵やぐら、日月やぐら、唐糸やぐら等 （国指定の史跡大町釈迦堂口遺跡）※	鎌倉時代後半～室町時代	「名越ヶ谷」と呼ばれる谷戸の奥部に位置する。64基を数え、市内でも大規模なやぐら郡である。地蔵やぐらには、中央に彫られた地蔵菩薩や五輪塔が安置されている。



写真2-267 地蔵やぐら
（大町釈迦堂口遺跡）

名称	成立年代（推定）	概要
百八やぐら(覚園寺) （国指定の史跡覚園寺境内）（県指定史跡）※	鎌倉時代後半～室町時代	覚園寺裏山の山腹に位置する。170 基以上を数え、仏像や五輪塔・宝篋印塔が刻まれたものなど、鎌倉の代表的なやぐらが多く見られる。
瓜ヶ谷やぐら群 （国指定の史跡仮粧坂）（市指定史跡）※	鎌倉時代後半～室町時代	葛原岡・大仏ハイキングコースの中間にある葛原岡神社の北側にあるやぐらで、5 基を数え、中でも中央に丸彫りの地藏菩薩が安置され、五輪塔や仏像などの壁面彫刻が刻まれているやぐらが最大である。
多宝寺址やぐら群 （市指定史跡）	鎌倉時代後半～室町時代	浄光明寺東側の多宝寺跡に残るやぐらで、8 基が確認されている。五輪塔や宝篋印塔が残り、常滑焼の壺や写経石などが出土している。
番場ヶ谷やぐら群 （市指定史跡）	鎌倉時代後半～室町時代	十二所の番場ヶ谷にあるやぐらで、20 基を数える。「元徳三年」（1331 年）の銘文が刻まれた五輪塔の地輪が出土しており、14 世紀に成立したものと推定できる。
相馬師常墓やぐら （市指定史跡）	鎌倉時代後半～室町時代	扇ガ谷にあるやぐらで、千葉常胤の次男相馬師常の墓と伝わる。奥壁にある大型の龕は切石で閉鎖されており、鎌倉にあるやぐらの中でも特色のある形態である。

※ 国指定の史跡の中にあるやぐらを指す。いずれも史跡の構成要素となっている。

(ウ) 歴史的風土特別保存地区指定の山稜

鎌倉の景観を形成している山稜の中でも、古都保存法に基づく歴史的風土特別保存地区に指定されている山稜は、古都保存法の発祥の地としての歴史的な意義を有し、鎌倉のまちの骨格になるものとして市民、関係団体、事業者や鎌倉を訪れる人々にも広く認知されている。

古都保存法は、この「歴史的風土」の保存を目的として制定された法律であり、「歴史的風土」を「歴史的な建造物や遺跡などと、それを取り巻く樹林地などの自然的環境が一体となって古都らしさを醸し出している土地の状況」と定義している。社寺、史跡、自然的地形が密接に結びついている鎌倉は、まさに歴史的風土の典型例として、現在、市域の約14.5%にあたる573.6haが歴史的風土特別保存地区に指定されている。

歴史的風土特別保存地区に指定された山稜では、古都保存法の厳格な運用と市民の意識や活動に支えられ、山稜の樹林と一体となった歴史的環境の保全がなされており、歴史的遺産と調和し、特有の古都の景観を形成する緑の源となっている。

これらの山稜は、古都保存法制定に至る経緯や法制定以降の土地所有者等をはじめとした市民等の理解と協力を得て、歴史的遺産と一体となる自然的環境として保存されてきたことから、地域固有の歴史的建造物と捉える。

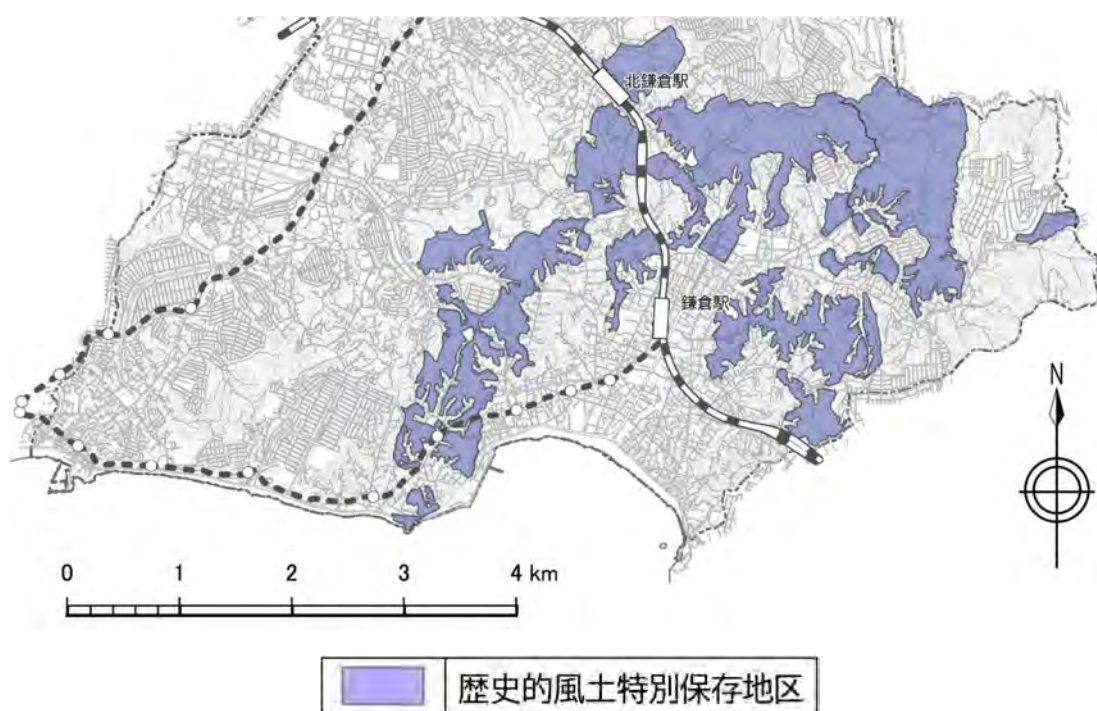


図2-38 歴史的風土特別保存地区

表2-13 歴史的風土特別保存地区の指定状況（令和8年(2026年)4月1日時点）

歴史的風土特別保存地区	
地 区 名	面積 (ha)
朝比奈切通し	7
瑞泉寺	119
護良親王墓	2
浄妙寺	8.1
永福寺跡	5.7
寿福寺	18
建長寺・浄智寺 ・八幡宮	172
円覚寺	29
大仏・長谷観音	110
極楽寺	9.8
稲村ヶ崎	6
妙本寺・衣張山	67
名越切通し	20
13 地区	573.6

※ 歴史的風土特別保存地区（573.6ha）のうち、206.3ha（36.0%）を神奈川県が所有管理している。
（令和8年（2026年）3月31日時点）

ウ 活動

御谷騒動に始まる一連の市民運動がきっかけとなり、特別措置法として制定されたのが古都保存法である。

鎌倉で御谷騒動が起きた頃、時を同じくして京都市、奈良市でも古都の景観を守ろうとする動きが高まり、各市に古都の環境保存を目的とした団体が組織されていった。古都における環境の保全については、従来から文化財保護法、都市計画法などに基づく各種の施策が講じられていたが、これらの法律をもって古都の景観を開発から守ることは到底できないという認識から、京都市、奈良市、鎌倉市の古都3市を中心とする「古都保存連絡協議会」が昭和40年（1965年）に結成され、古都の環境を保存する総合的な施策として、国に対して特別な立法措置を講じるよう要望した。

これにより関係都市選出の国会議員が中心となり、昭和41年（1966年）に超党派の議員立法による古都保存法が制定されることとなった。

鎌倉での市民運動が契機となる土地利用制度であるが、現在も市民の古都の環境に対する意識は高く、厳しい土地利用や建築規制を甘受し、その協力を得て、社寺・山稜の建造

物や緑が一体となった古都の景観を見ることができる。

また、この御谷騒動を契機に設立された「鎌倉風致保存会」により、鎌倉の緑地の保全活動や古都保存法の趣旨・目的の啓発活動が行われるようになった。

（ア）民間土地所有者の協力による古都の緑の保全

古都鎌倉の山稜を形成する緑のほとんどは、古都保存法に基づく歴史的風土特別保存地区、昭和 41 年（1966 年）に制定された首都圏近郊緑地保全法に基づく近郊緑地特別保全地区などに指定されているが、未だその多くは民有地であり、土地所有者が主体となり、行政の支援策を活用しながら緑地の保全を行っている。

緑地の所有者は自主的に、自身が持つ緑地内の樹木や竹の伐採・剪定、緑地内部の倒木・枯れ木の撤去処分などの維持管理作業を行っており、鎌倉の山稜周辺では、緑地の所有者から事業者が木々を伐採・剪定を行う姿を見ることができ、チェーンソーの音が聞こえ、鎌倉に住む人々が、鎌倉のまちが緑と一体となった風景を大切にしている思いを感じることができる。

これに対し、県及び市では緑地を将来にわたり良好に保全することを目的とし土地所有者の支援等を行っている。

例えば、県では、昭和 49 年（1974 年）に神奈川県自然保護奨励金制度を発足し、運用している。同制度は、対象となる土地所有者に対する協力謝礼及び最低限の維持管理経費を交付するというもので、この交付金により、みどりの量的な確保とみどりの機能を発揮するための維持管理を促進させ、緑地が持つ公的な機能の向上を図っている。

また、市では、昭和 63 年（1988 年）から樹林維持管理事業を展開してきた。この事業は、樹林環境の向上を図るために行ってきた、危険木などの伐採を制度化したもので、歴史的風土保存区域、近郊緑地保全区域などの良好な環境を守るため、毎年順番に決められた地区内の土地所有者からの申請に基づき、鎌倉市が所有者に代わり樹木の枝払い等を実施していた。令和 7 年度（2025 年度）からは、鎌倉市民有緑地維持管理助成事業を立ち上げ、運用している。同制度は、歴史的風土保存区域、近郊緑地保全区域などの指定区域内の山林の所有者に対し、管理負担の軽減のため、その機能を発揮させるために必要な維持管理に要する費用に対し助成を行うものである。

このような緑地などの土地の所有者、県や市の取組が続いていくことで、現在も山稜の建造物や社寺の背景としての緑が一体となった鎌倉独自の景観が守られ、鎌倉に住む人々だけでなく、訪れる人たちも古都の風情を感じることができるのである。



写真2-268 市民による緑地等の手入れの様子(昭和 52 年(1977 年))

(イ) 鎌倉風致保存会の活動

御谷騒動を契機として文化人や著名人が発起人となり鎌倉市からの出資を受け、先述のように財団法人鎌倉風致保存会が設立された(平成23年(2011年)4月より公益財団法人となる)。昭和41年(1966年)に集まった寄付金と鎌倉市からの出資金で「御谷の森」1.5haを買収したことで我が国初のナショナルトラスト運動となった。

現在、鎌倉風致保存会は鎌倉市内に8.0haの緑地を所有管理するほか、坂井家住宅の活用を行うなど、歴史的建造物の保存・継承を図ることで、古都保存法制定に至る経過の周知や風致保全の重要性など幅広い普及啓発活動を進めている。

現在、会は鎌倉の自然の風光と豊かな文化財を後世に伝えることを目的に活動を継続し、市民の理解と意識の継承を図っている。また、活動に際しては、会の主旨を広く説明し、会の活動への参加と募金の協力を広く呼び掛けている。

a 緑地等の手入れ・清掃

鎌倉風致保存会では、先の御谷騒動以降、市民からの寄付金を募るなどして土地などを買い取るナショナルトラスト運動を行ってきた。平成9年(1997年)からは緑の手入れを自分たちの手で行う「みどりのボランティア」の活動に取り組んでいることが、同年の事業報告書に記載されている。ボランティア活動は年40回ほど、市民や企業ボランティアを広く募り、参加者は延べ1,000人以上に及び、会が所有している御谷山林(約1.5ha)、^{じゅうにそ}十二所果樹園(約5ha)に加え、史跡保存として、国指定の史跡の東勝寺跡、浄光明寺、朝夷奈切通や大仏切通、市指定史跡の内藤家墓地、建長寺回春院、光則寺など史跡に続く寺院の後背の緑地等での下草刈り、枝払い、倒木の処理などを行っている。



写真2-269 みどりのボランティア
(平成9年(1997年))



写真2-270 みどりのボランティア

b 古都保存法の主旨や緑地保全の重要性の周知・啓発活動

鎌倉風致保存会では、緑の手入れだけに止まらず、年間を通じて、様々なイベントを開催し、古都保存法制定に至る経緯や法の周知・啓発を行っている。

春と秋の旧大佛次郎茶亭公開は、会が支援する旧大佛次郎亭を公開する目的で開始され

ている。昭和 58 年（1983 年）から始まったことが、同年の事業報告書に記載されている。公開の時期には、貴重な歴史的建造物を見ようと多くの人々が来場する姿が見られる。



写真2-271 旧大佛次郎茶亭公開
（昭和 58 年(1983 年)）



写真2-272 旧大佛次郎茶亭公開

この他にも、十二所果樹園で収穫した梅の販売会、家族で栗拾い、海岸清掃、藍染め体験教室、クリスマスリース教室やナショナルトラストコンサートなどで、いずれのイベントも毎回数多くの人々の参加を得ている。

また、平成元年（1989 年）から毎年開催される「鎌倉市緑化まつり」には、平成 3 年（1991 年）から鎌倉風致保存会のブースを出店し、古都保存法に係るパネル展示などを行っている。

毎年、鎌倉駅東口と西口をつなぐ地下道のギャラリーでも同様のパネル展示を行っており、ギャラリー前では、足を止め、パネルを見る人々の姿が見られる。

鎌倉風致保存会の普及・啓発活動は、前述の古都保存法だけでなく、緑地保全の重要性を広く一般に周知するための活動にも及んでいる。「歴史ウォーク」（鎌倉風致保存会主催）は、平成 20 年（2008 年）に開始した事業で、年 4 回開催している。また、「古都鎌倉の緑と歴史探訪」（公益財団法人かながわトラストみどり財団との共催）は、平成 22 年（2010 年）に開始した事業で、春と秋の年 2 回開催している。



写真2-273 古都鎌倉の緑と歴史探訪
（平成 22 年(2010 年)）

これらでは、それぞれに歴史や考古学等の専門家を講師として招き、講師の引率を得て、テーマに基づいて市内の史跡や山稜部を周りながら、今も残る土木遺構の解説や文化財としての価値、これらと一体となる緑の重要性などを参加者に説明し、史跡や山稜部の緑を守ることについて人々の意識の醸成を図っている。加えて、鎌倉市立中学校の卒業前の3年生を対象に、自分たちの住んでいるまちの自然とその保存に関心を持ってもらうため、市内の緑地の手入れ・海岸清掃など、地域のボランティア活動の場を提供するなど、啓発活動の範囲を広げている。

イベント時には、関係者が講師から真剣に話を聴く姿や、学生が緑地の手入れ・海岸の清掃活動などに励む姿が見られ、鎌倉のまちや自然に向き合う人々の思いを感じることができる。

c ハイキングコースの安全確認・史跡の点検（ハイキング・パトロール）

緑地の保全や普及・啓発活動の他に、鎌倉風致保存会と市との協働事業として、平成20年（2008年）から、天園、祇園山及び葛原岡・大仏ハイキングコースのパトロールを実施している。会員のボランティアが中心となり、倒木の処理、枯損枝・危険枝の除去、危険木の確認やその報告書の作成などを行っている。パトロールを通して、これらのハイキングコースが、眺望景観だけでなく、鎌倉の貴重な財産として大切に守り、より良くしていこうとする参加者の使命感を感じることができる。



写真2-274 歴史ウォーク
(平成22年(2010年))



写真2-275 ハイキング・パトロールの写真
(平成20年(2008年))

(ウ) やぐらにおける供養

前述のとおり、鎌倉の山稜部をはじめとした各所で見られるやぐらでは、地域住民やそこを訪れた人たちによって、供養のための献花や清掃などが古くから行われ、大切にされていたことが昭和30年（1955年）代の写真からも確認できる。現在も、ハイキングコース沿いにある小規模なやぐらも含め、鎌倉市内の各所で献花や供物が供えられている光景や訪れた人が手を合わせる光景を見ることができる。こうした光景と通じて、やぐらが今もなお、供養の対象として地域の人々に大切に扱われていることを感じられる。

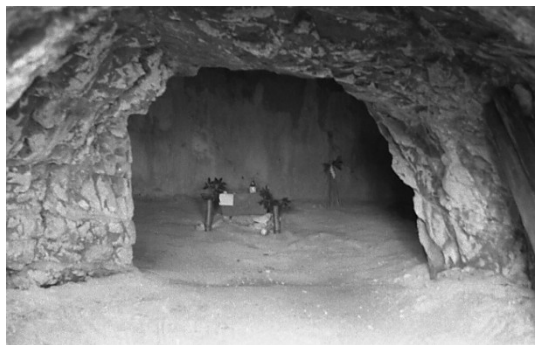
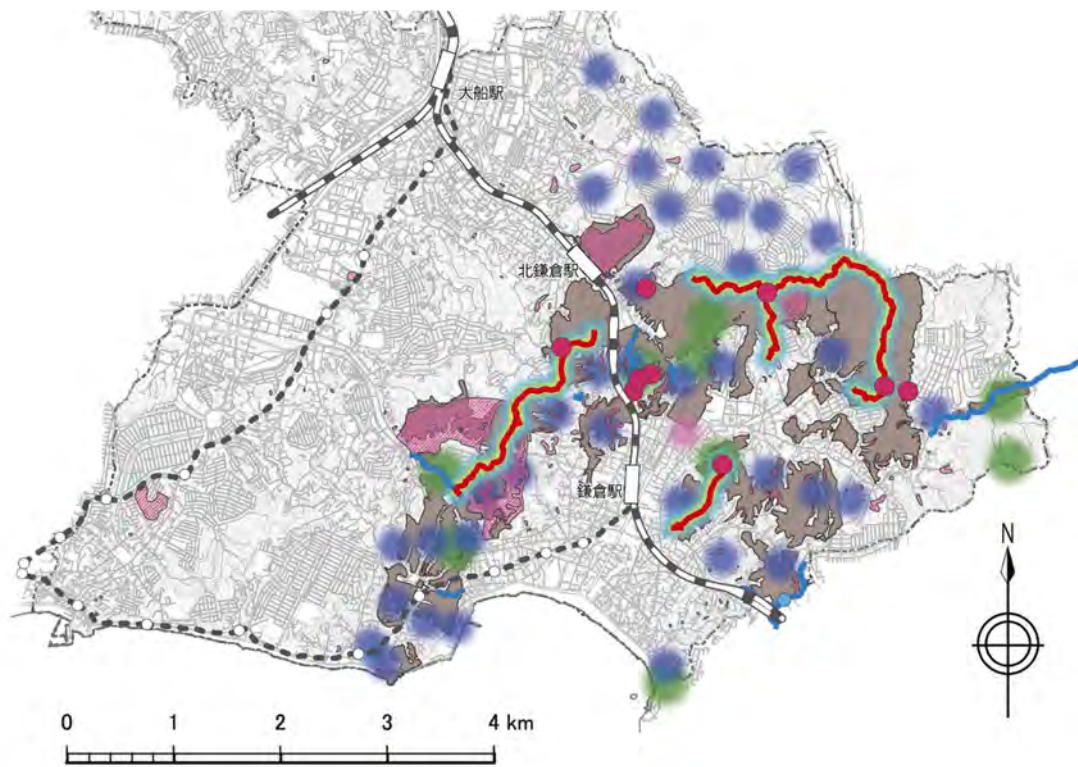


写真2-276 やぐらの献花等の写真
(昭和30年(1955年)代)



	歴史的風致を 形成する建造物	切通
		大切岸
		やぐら
		やぐらが埋蔵されている範囲 (埋蔵文化財包蔵地の一部)
		歴史的風土特別保存地区

	民間土地所有者による緑の保全活動が見られる範囲 (自然保護奨励金交付箇所)	
	鎌倉風致保存会 の活動が 見られる範囲	みどりのボランティア実施場所
		周知・啓発活動
		ハイキングパトロールの実施場所
	やぐらにおける供養が見られる場所	
	ハイキングコース	

図2-39 歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動の市街地への広がり

表2-14 山稜の主な保全活動の年表

活動主体	活動名	昭和39年	昭和45年	昭和55年	平成2年	平成12年	平成22年	令和2年	現在
		1964年	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2020年	
土地所有者	所有する緑地の保全	土地所有者の協力による古都の緑の保全							
		神奈川県自然保護奨励金制度による支援							
		鎌倉市の樹林維持管理事業による支援							
		鎌倉市民有緑地維持管理助成事業による支援							
鎌倉風致保存会	緑地等の手入れ・清掃	御谷の森 取得		所有する緑地の手入れ・清掃					
		みどりのボランティアの実施							
	御谷騒動・鎌倉風致保存会の設立								
	古都保存法の制定								
	旧大佛次郎茶亭の一般公開								
	古都保存法の主旨や緑地保全の重要性に関する周知・啓発活動	鎌倉市緑化まつりへの参加							
		歴史ウォークの開催							
古都鎌倉の緑と歴史探訪の開催									
ハイキングコースの安全確認・史跡の点検(ハイキング・パトロール)	ハイキング・パトロールの実施								
	住民・来訪者								
住民・来訪者	やぐらにおける供養	献花などのやぐらにおける供養							

エ まとめ

鎌倉を取り囲む山稜には、鎌倉時代に武家が山に手を加えて造った切通ややぐらなどの多くの文化財が今なお点在しており、山稜部そのものが後世に守り伝えていかなければならない文化財であるともいえ、鎌倉の歴史が形成される上での物理的な基盤となっている。

特に、やぐらは、地形と相まった宗教都市鎌倉独自の墓の形であり、独特の景観を形づくっている。

こうした社寺などの歴史的遺産とその背景となる緑、その周囲の市街地が調和し、一体となった鎌倉特有の景観は、山稜部そのものが昔と変わらぬ形で守られてきたことの上に成立している。こうした歴史を踏まえ、中世の歴史的遺産とともに、古都保存法制定の経緯と精神を理解し、古都の緑と景観を守るという鎌倉市民の意識は、御谷騒動から60年以上経った今でも非常に高く、古都保存法による丘陵部の厳しい土地利用制限や景観形成の取組に対し、市民の理解と協力が得られている。また、市内では自然環境保全、景観保全などを目的とした緑に関する多くの団体が活動している。その中でも中心となるのが、御谷騒動に端を発して設立された鎌倉風致保存会である。

このように古都鎌倉の歴史的風土は、それを守り、後世に伝えようとする鎌倉市民の精神とそれに由来する活動によって守り伝えられてきた。言い換えれば、市民に継承されてきた歴史的風土保存の動きが、鎌倉における地域固有の歴史的風致を形成しているといえる。

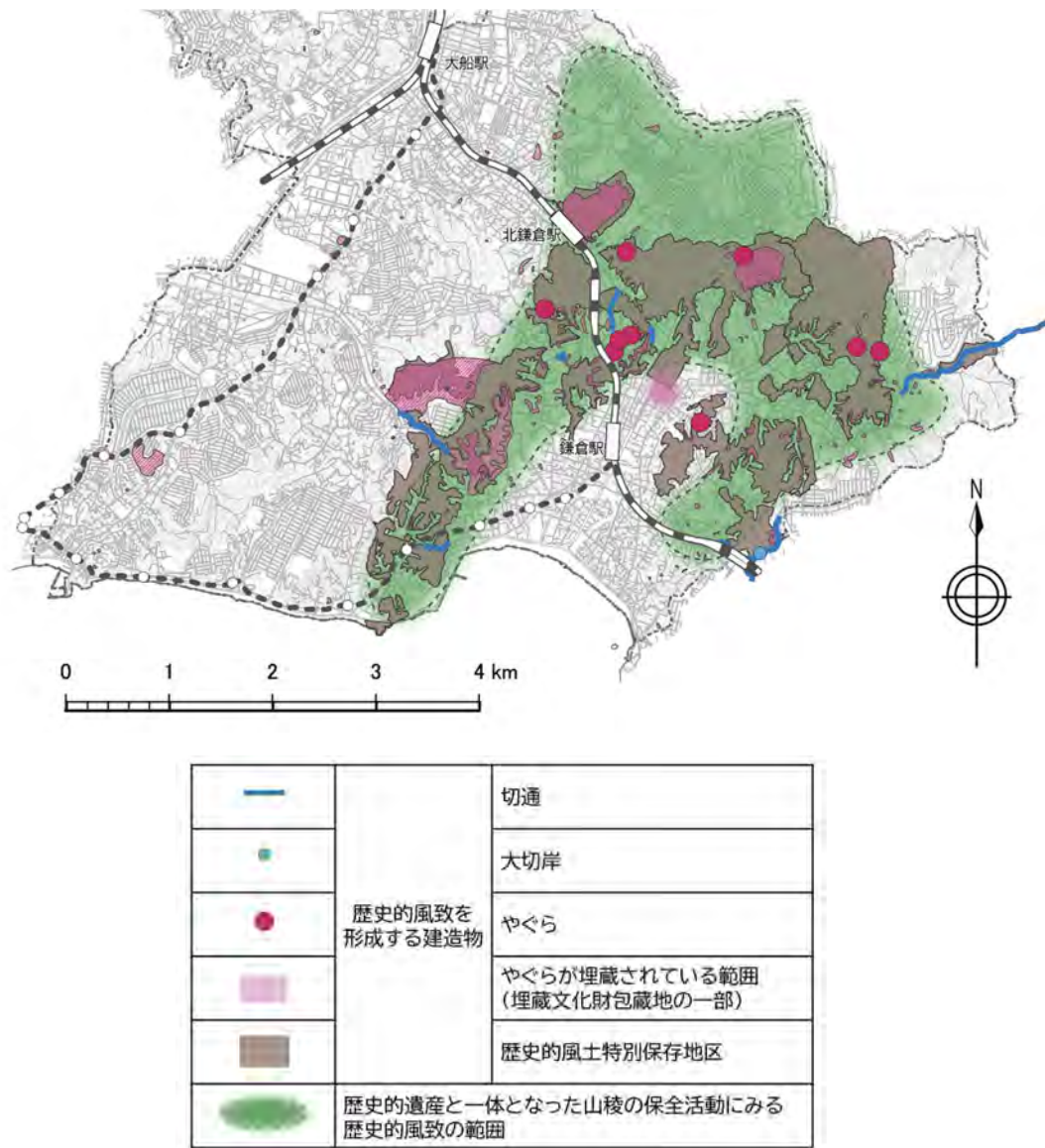


図2-40 歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致の範囲

コラム 鎌倉古道

切通を含む若宮大路・大町大路をはじめとする鎌倉古道は、鎌倉時代に鎌倉と各地を結ぶために整備された道で、鎌倉幕府が置かれていた鎌倉を中心に、関東一円に広がっていた。

京都に近い側から「上道」「中道」「下道」と呼ばれている3本の幹線道路から、多くの支道が枝分かれしていた。これらの道は鎌倉幕府の御家人たちが鎌倉に向かうための戦略的な道として、また、物流の幹線道路としても利用されていた。

古道は山稜・社寺、山稜部同士を結び、これら街道沿いには、建長寺、円覚寺をはじめとする社寺や庚申塔、石仏などが点在している。その一部は尾根沿いのハイキングコースや人々の生活を支える道として今も使われており、これらを巡ることで鎌倉の歴史や中世の生活や文化を垣間見ることができる。